高松市埋蔵文化財調査報告　第254集

仏生山駅前マンション建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

萩前・一本木遺跡Ⅴ

2024年6月

高松市教育委員会
穴吹興産株式会社

仏生山駅前マンション建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

萩前・一本木遺跡Ⅴ

二〇二四年六月　高松市教育委員会・穴吹興産株式会社

例　言

1　本書は、香川県高松市仏生山町に所在する萩前・一本木遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査地、調査期間及び調査面積は次のとおりである。
調査地　　高松市仏生山町字鵜殿口甲 846 番 1 他
調査期間　令和 4 年 12 月 1 日～令和 5 年 5 月 26 日
調査面積　1,137㎡

3　本調査に当たり高松市、高松市教育委員会、穴吹興産株式会社は「仏生山駅前マンション建設工事に伴う埋蔵文化財調査管理業務」に関する協定書を締結した。

4　発掘調査及び整理作業は、高松市教育委員会が実施した。調査及び整理作業に関する費用は、全額を穴吹興産株式会社が負担した。

5　発掘調査は、高松市創造都市推進局文化財課文化財専門員 品川愛・会計年度任用職員 中西 克也が担当し、整理作業及び本報告の執筆・編集は品川が行った。

6　地震痕跡の検討に当たり、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所 村田泰輔氏に御助言を賜った。記して感謝する次第である。

7　以下の業務については、委託業務により執り行われた。
基準点打設：　株式会社 四航コンサルタント
空中写真測量：　株式会社 四航コンサルタント
遺物写真撮影：　西大寺フォト

8　発掘調査で得られたすべての資料は、高松市教育委員会で保管している。

9　地理的・歴史的環境については、既刊の高松市埋蔵文化財調査報告第 177 集『萩前・一本木遺跡Ⅰ』を参照されたい。

凡　例

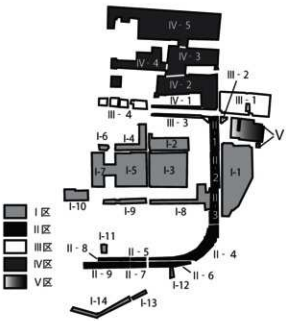
1　標高は東京湾平均海面高を表し、座標は平面直角座標系 第Ⅳ系（世界測地系）に従った。また方位は座標北を示す。土層注記及び遺物観察表の色調表記は『新版 標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・一般財団法人日本色彩研究所 色票監修）に拠る。

2　挿図の土層注記は、調査時の意図を尊重して、そのまま記載する。

3　実測図における種類ごとの網掛けは以下のとおりである。

須恵器　　須恵器（焼成不良）

4　本書では、過去の調査区に関して、以下のように区別して言及している。



本　文　目　次

第Ⅰ章　調査に至る経緯と経過…… 1
第１節　調査に至る経緯……1
第２節　調査の経過……1

第Ⅱ章　調査の成果…… 2
第１節　基本層序……2
第２節　調査の方法……3
第３節　遺構と遺物……3

第Ⅲ章　まとめ…… 36
第１節　調査成果の概要…… 36
第２節　集落の変遷…… 36

挿　図　目　次

図１　調査区割 …… 1
図２　Ⅰ層の分布 …… 2
図３　Ⅰ層上面のひび割れ …… 3
図４　Ⅲ層上面のひび割れ …… 3
図５　ひび割れ断面 …… 3
図６　空港跡地遺跡の噴砂
（香川県教育委員会 2002）…… 3
図７　調査区の位置 …… 4
図８　遺構配置図 …… 5
図９　ＳＩ７平面図 …… 7
図 10　ＳＩ７断面図・出土遺物 …… 8
図 11　ＳＩ７カマド平・断面図・出土遺物
…… 9
図 12　ＳＩ８平・断面図・出土遺物 ……10
図 13　ＳＩ 10 平・断面図 ……11
図 14　ＳＩ 10 内ピット断面図・出土遺物
……12
図 15　ＳＩ 10 カマド平・断面図 ……13
図 16　ＳＩ 12 平・断面図 ……14
図 17　ＳＩ 13 平・断面図・出土遺物 …15
図 18　ＳＩ 14 平・断面図・出土遺物 …16
図 19　ＳＩ 15 平・断面図 ……17
図 20　ＳＩ 15 カマド平・断面図 ……18
図 21　ＳＩ 15 出土遺物 ……19
図 22　ＳＩ 16 平・断面図 ……20
図 23　ＳＢ２平・断面図 ……21
図 24　ＳＢ３平・断面図・出土遺物 ……22
図 25　ＳＢ４平・断面図 ……23
図 26　柵列１平・断面図・出土遺物 ……24
図 27　柵列２平・断面図 ……24
図 28　ＳＤ１平・断面図 ……25
図 29　ＳＤ１出土遺物 ……26
図 30　土坑平・断面図 ……27
図 31　土坑出土遺物 ……28
図 32　ＳＸ１・２平・断面図 ……29
図 33　ＳＸ３平・断面図・出土遺物 ……30
図 34　ＳＸ４平・断面図 ……31
図 35　ＳＸ８平・断面図 ……32
図 36　ＳＸ９平・断面図・出土遺物 ……33
図 37　ＳＰ４出土遺物 ……33
図 38　ピット平・断面図 ……34
図 39　遺構外出土遺物 ……35
図 40　発掘調査及び工事立会の範囲 ……36
図 41　遺構変遷図① ……37
図 42　遺構変遷図② ……38
図 43　遺構変遷図③ ……39
図 44　遺構変遷図④ ……40
図 45　遺構変遷図⑤ ……41

挿　表　目　次

表１　観察表（土器）①……43
表２　観察表（土器）②……44
表３　観察表（土器）③……45
表４　観察表（土器）④……46
表５　観察表（玉類・石器）……46
表６　観察表（鉄器）……46

写　真　図　版　目　次

図版１　第３調査区東半
第３調査区西半
図版２　第４調査区
第４調査区ＳＢ３・４
図版３　第３調査区南拡張区～東拡張区
第３調査区南拡張区柵列１
図版４　第１調査区地山確認状況
第２調査区完掘状況
第５調査区完掘状況
図版５　ＳＩ７貼床上面掘削状況
ＳＩ７カマド遺物出土状況
ＳＩ７カマド完掘状況
図版６　ＳＩ10 貼床上面掘削状況
ＳＩ10 南半
ＳＩ10 カマド半裁状況
図版７　第３調査区東半北壁付近完掘状況
ＳＫ３完掘状況
ＳＩ12 埋土除去後掘削状況
ＳＩ14 完掘状況
ＳＢ２完掘状況
ＳＰ４半裁状況
第３調査区北拡張区完掘状況
図版８　ＳＤ１遺物出土状況
ＳＩ15 貼床上面掘削状況
ＳＩ15 カマド完掘状況
図版９　出土遺物①
図版10　出土遺物②
図版11　出土遺物③
図版12　出土遺物④
図版13　出土遺物⑤
図版14　出土遺物⑥

第Ⅰ章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

穴吹興産株式会社東四国支店（以下、事業者）により、高松市仏生山町においてマンション建設事業が計画され、埋蔵文化財包蔵地の有無の照会があった。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地「萩前・一本木遺跡」の隣接地に位置するため、令和４年９月29日～30日に試掘調査を実施した。試掘調査の結果、埋蔵文化財の包蔵状況が確認され、周知の埋蔵文化財包蔵地「萩前・一本木遺跡」の範囲変更を行った。試掘調査後、事業者から同年11月10日に文化財保護法第93条第１項に基づく埋蔵文化財発掘の届出が提出され、香川県教育委員会（以下、県教委）から同日付けで事前に発掘調査を行う旨の行政指導があったため、発掘調査を実施することとなった（図１第１～４調査区）。

その後、事業者から掘削範囲を変更する旨の連絡があり、発掘調査面積が増加する見込みとなった。敷地内には既存の建物基礎による撹乱が各所にみられたため、新たに掘削が及ぶ範囲の遺構の残存状況を明らかにするための確認調査を令和５年２月３日～14日に実施した。その結果、新たに掘削する範囲にも遺構が残存していることが明らかになり、同年３月31日に文化財保護法第93条第１項に基づく埋蔵文化財発掘の届出が提出され、県教委から同年４月10日付で事前に発掘調査を行う旨の行政指導があり、追加の発掘調査を実施した（図１第３調査区北・東・南拡張区、第５調査区）。

第２節　調査の経過

発掘調査は令和４年12月１日～令和５年５月26日まで実施した。発掘調査では調査範囲を図１のとおり分割し、第３調査区は東西で２分割して掘削した。整理作業は令和５年６月～令和６年６月まで実施した。

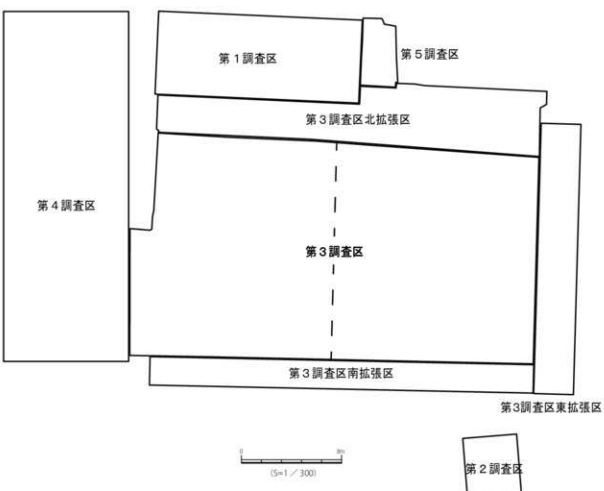


図１　調査区割

第Ⅱ章　調査の成果

第１節　基本層序

(1) 基本層序

調査区内の基本層序は、表土付近の撹乱、旧耕作土を除いて、大きくⅠ層（黒色系シルト層、遺物包含層）、Ⅳ層（灰黄褐色系極細砂層、地山）層に分かれる。地山（Ⅳ層）の検出レベルは第３調査区中央から第４調査区で約 35.2 m、第３調査区東拡張区で約 35.0 m、第１、５調査区で約 34.9 mと東、北方向に向かって低くなり、Ⅳ層の検出レベルが低い地点にⅠ層が堆積する（図２）。Ⅰ、Ⅳ層上面が遺構面となり、標高は約 35.2 mである。なお、第１、５調査区ではⅠ層とⅣ層の間に、にぶい黄橙色系極細砂層（Ⅱ層、地山）、黒褐色系極細砂層（Ⅲ層、地山）を挟む。

(2) 噴砂状のひび割れについて

Ⅰ～Ⅲ層及び遺構埋土上面では無数のひび割れが観察された（図３、４）。ひび割れは深いものではⅣ層に達し（図５）、平面形はⅠ層、遺構埋土上面では亀甲状（図３）、間層のⅢ層では筋状や人の字型を呈する（図４）。

本調査で確認されたひび割れの成因に関して、現場の写真を奈良文化財研究所の村田泰輔氏に観察していただいたところ、以下の特徴から噴砂によって生じたものであるとの回答を得た。

・図５の「ひび割れ断面」では、Ⅳ層が大きく撓んでおり、地層の変形構造である「火炎構造」が観察される。

・Ⅳ層を端に「ひび割れ」と呼んでいる貫通構造「砂脈」が観察される。

・これらの構造は、間隙水の涵養が大きい地層が激しく揺さぶられることで発生する「液状化」に伴って形成する典型的な構造と認められる。

・液状化を起こす振動は、現代の重機等を用いた激しい工事振動を原因とすることもあるが、一般的には過去の巨大地震の痕跡と考えられる。

・Ⅳ層に端を発する砂脈群は、少なくとも遺構埋土上面まで達しており、通過するⅢ層では「筋状」や「人の字型」（図４）、Ⅰ層や遺構埋土上面では「亀甲状」（図３）の亀裂を形成している。上位層に向かって細かく密度が上昇する地層の破壊構造は、地盤（地質）内の水平土圧が小さくなっていくことを反映していると考えられる。

また、同様のひび割れは、萩前・一本木遺跡から約２km 北に位置する空港跡地遺跡で確認されている（図６）。空港跡地遺跡では、ひび割れ内部に含まれる砂粒の粒度分析が行われ、上部ほど粒径が小

図２　Ⅰ層の分布

さくなることから、噴砂によって生じたものであると報告されている（香川県教育委員会 2002）。

萩前・一本木遺跡周辺でも、今後粒径分析等を実施し、噴砂に関する客観的なデータを蓄積していくことが望まれる。また、萩前・一本木遺跡ではこれまでの調査で、複数個所で噴礫が確認されている。噴砂と噴礫を生じさせた地震が同一のものであるかどうかという点は、震度５弱以上の地震の周期を明らかにしていく上では重要である。地震痕跡と遺構の切り合い関係を確認していくことも今後の調査の課題として挙げておきたい。

第２節　調査の方法

遺構面まで重機で掘削した後、人力で遺構面を精査し、遺構掘削を行った。遺構検出に当たり、Ⅰ層が分布する範囲では、遺構埋土がⅠ層と同質の黒色シルト～極細砂であること、層中に噴砂と考えられる多数のひび割れが走ることから検出が難しく、遺構面を数cmごとに面的に掘り下げ、遺構の平面形を確認した。また、数か所に断面確認用のベルトを設け、平断面で境界を確認しながら遺構検出を行った。

記録作業に関して、調査に係る基準点打設及び空中写真測量を株式会社四航コンサルタントに委託した。また、面積が拡大した部分については、基準点を基に 1/20 の縮尺で平面図を作成した。

遺構名は調査時に付したものを原則踏襲している。ただし、調査面積が拡大した際、整理段階等に、当初の想定と異なる性格の遺構または包含層の一部と判断した場合は、当初の遺構名は欠番とし、新たな遺構名を付した。

第３節　遺構と遺物

本調査区は、遺跡東部、Ⅰ－１調査区とⅢ－１調査区の間に位置する（図７）。調査区内には既存の建物による撹乱が多数みられ、特に調査区北部では遺構面がほとんど残存していなかった。また、噴礫とみられる礫の集積や、噴礫や風倒木によって生じたと考えられる落ち込みが各所で確認された。

〈引用・参考文献〉

香川県教育委員会 2002『空港跡地遺跡Ⅴ』

図３　Ⅰ層上面のひび割れ

図４　Ⅲ層上面のひび割れ

図５　ひび割れ断面

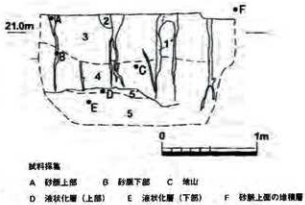


図６　空港跡地遺跡の噴砂（香川県教育委員会 2002）

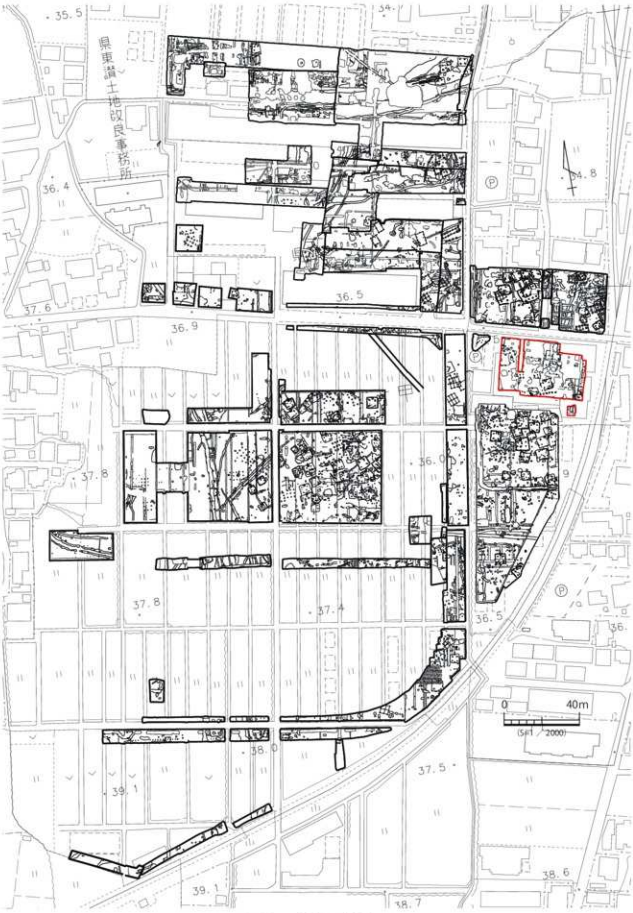

県東部土地改良事務所
35.5
36.4
37.6
36.9
36.5
34.8
37.8
36.0
37.8
37.4
36.5
36.
38.0
39.1
37.5
39.1
38.7
38.6
0
40m
(S=1/2000)

図７　調査区の位置

一遺構または拡張によって形成された落ち込み

一遺構の推定範囲（遺構外）

1:150

0　2　4　6　8m

図8　遺構配置図

(1) 竪穴建物

ＳＩ７

第３調査区中央南寄りで検出した竪穴建物である。平面形は長辺約６ｍ、短辺約５ｍの長方形を呈する。面積は30㎡である。主軸方位はＮ-10°-Ｅであり、検出時の標高は約35.2ｍである。埋土の厚さは約10㎝、貼床の厚さは約10cmである。ＳＫ１に切られ、ＳＫ６、ＳＰ12を切る。

竪穴建物北東には礫の集積がみられる。礫周辺の竪穴建物埋土の堆積が乱れており、噴礫と考えられる。

竪穴建物埋土はにぶい黄褐、褐灰、灰白、黒褐色等を呈するシルトまたはシルト質極細砂である。埋土から須恵器壺（１）、坏蓋（２）、貼床から坏身（３）、甕（４）が出土した。

竪穴建物北壁中央にカマドが作りつけられている。カマドのソデは平面ハ字状を呈する。カマド内部は、上半に炭や焼土を含む黄褐灰色系シルト層と焼土が互層状堆積し、当時の機能面であったと考えられる。下半に焼土を含む灰黄褐色系のシルト層が堆積する。カマドのソデは灰黄色シルトによって構築されている。カマド内部からは土師器甑（５、６）、滑石製臼玉（Ｓ１）が出土した。

貼床直上で４基のピット、壁溝を検出した。ＳＰ１～４は竪穴建物の柱穴と考えられる。直径約40㎝、深さ約20～40㎝を測る。各柱穴の断面に直径10～20㎝程度の柱痕が残る。壁溝は一部で確認し、幅約10～20㎝、深さは約５㎝である。貼床除去後にＳＰ12、ＳＫ６を検出した。ＳＰ12は直径約20㎝、深さ約８㎝を測る。

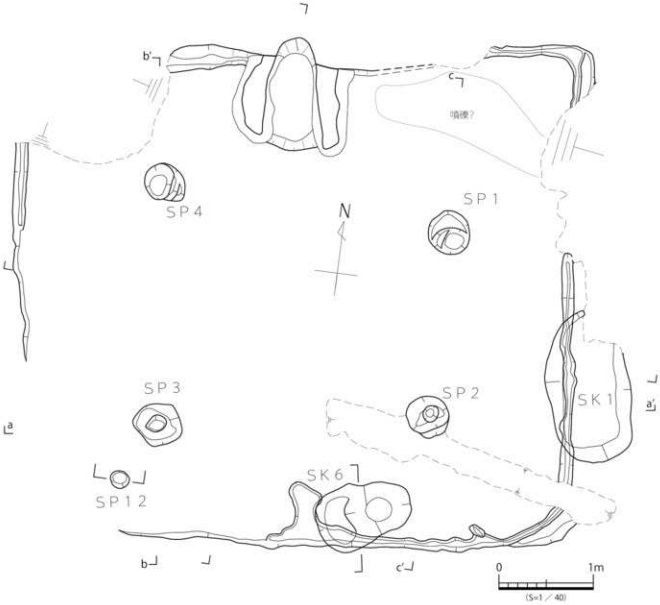
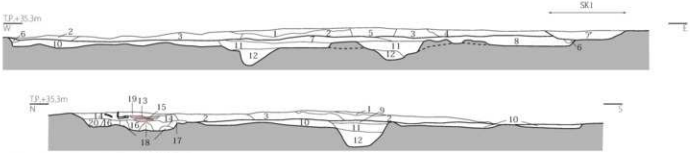


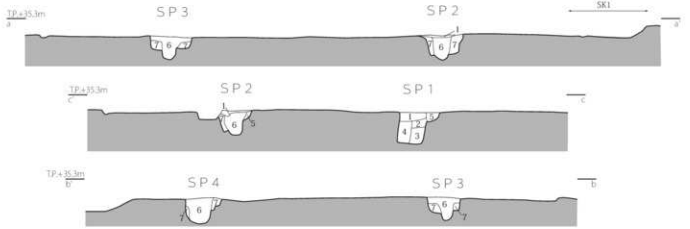
図９　ＳＩ７平面図



SK1　ア　7.5YR6/4 にぶい橙　シルト質極細砂

SI7
1　10YR6/3 にぶい黄橙　シルト質極細砂（灰白粒砂を含む）
2　10YR4/1 褐灰　シルト質極細砂
（10YR7/2 にぶい黄橙　シルト質極細砂粒を含む）
3　10YR8/2 灰白　シルト
4　10YR5/3+7/2 にぶい黄褐+にぶい黄橙　シルト質極細砂
5　10YR3/1 黒褐　シルト質極細砂
6　10YR5/2 灰黄褐　シルト質極細砂（焼土粒を若干含む）（壁溝）
貼床
7　10YR8/2 灰白　シルト（グライ化）
8　7.5YR5/3 にぶい褐　シルト質極細砂（地山粒を 5% 含む）
9　10YR3/1+7.5YR5/3 黒褐+にぶい褐　シルト質極細砂
10　10YR4/1 褐灰　シルト質極細砂+10YR8/3 浅黄　シルト
11　10YR2/1 黒　シルト質極細砂（地山粒を 10% 含む）
12　10YR2/1 黒　シルト質極細砂（地山粒を 20% 含む）
カマド
13　焼土
14　10YR5/2+4/2 灰黄褐　シルト質極細砂（焼土粒・炭含む）
15　焼土
16　10YR5/2 灰黄褐　シルト質極細砂（焼土を含み地山粒を 10% 含む）
17　2.5Y5/2 暗灰黄　シルト質極細砂（焼土を若干含む）
18　10YR7/2 にぶい黄橙　シルト（石層含む）
19　10YR6/2 灰黄褐　シルト質極細砂（焼土を若干含む）
20　10YR6/2 灰黄褐　シルト質極細砂（焼土粒含む）

0　1m
(S=1／40)



1　10YR4/2+5/4 灰黄褐+にぶい黄褐　シルト質極細砂（焼土・炭を若干含む）
2　10YR4/2 灰黄褐　シルト質極細砂（地山 5% 含む）
3　10YR3/2+4/2 黒褐+灰黄褐　シルト質極細砂（地山 7% 含む）
4　10YR3/1 黒褐　シルト質極細砂（地山 5% 含む）
5　10YR5/3+7.5YR5/3 にぶい黄褐+にぶい褐　シルト質極細砂
6　10YR5/2 灰黄褐　シルト質極細砂
7　10YR5/2 灰黄褐　シルト質極細砂（地山ブロックを 50% 含む）

SP12

1　10YR3/1 黒褐　シルト質極細砂
（地山ブロックを 10% 含む）

0　1m
(S=1／40)

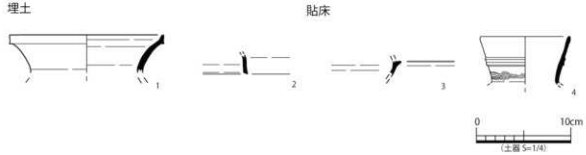


図 10　ＳＩ７断面図・出土遺物

1　10YR4/1 褐灰　シルト質極細砂（住居埋土の２層と同じ）
2　10YR6/2 灰黄褐　シルト質極細砂（焼土粒含む）
3　焼土
4　10YR5/2＋4/2 灰黄褐　シルト質極細砂（焼土粒・炭含む）
5　焼土
6　10YR5/2 灰黄褐　シルト質極細砂（焼土を含み地山ブロックを 10％含む）
7　2.5Y5/2 暗灰黄　シルト質極細砂（焼土を若干含む）
8　10YR7/2 にぶい黄橙　シルト（６層含む）
9　10YR6/2 灰黄褐　シルト質極細砂（焼土を若干含む）
10　2.5Y7/2 灰黄　シルト（カマドのソデ）
11　10YR8/2 灰白　シルト（住居埋土の３層）

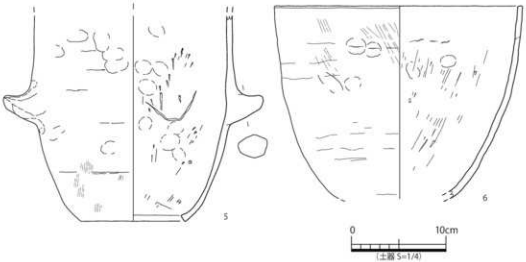


図 11　ＳＩ７カマド平・断面図・出土遺物

遺構の時期は、出土遺物や建物の主軸から、ＴＫ23～47型式併行期と考えられる。

ＳＩ８

第３調査区東端、第３調査区東拡張区で検出した竪穴建物である。柵列２に切られ、ＳＰ34を切る。建物主軸はＮ-21°-Ｅであり、南北4.7m、東西5m以上、埋土の厚さ約30㎝である。検出レベルは約35.3mである。埋土は黒褐色極細砂である。

埋土１層除去後に遺構検出を行ったが、ピット、壁溝等は検出されなかった。また、埋土２除去後に遺構検出を行い、ＳＰ34を検出した。ＳＰ34は直径約10cm、深さ約6cmを測る。

埋土からは須恵器坏蓋（７）、甕（８）が出土した。出土遺物から遺構の時期は、ＴＫ217型式併行期と考えられる。

図12　ＳＩ８平・断面図・出土遺物

ＳＩ10

第３調査区南端から第３調査区南拡張区にかけて検出した竪穴建物である。平面形は長辺約4.7m、短辺3～4.7mの歪な長方形を呈する。面積は16.28㎡である。主軸方位はN-14°-Eであり、検出時の標高は約35.2mである。埋土の厚さは約10㎝、貼床の厚さは約10㎝である。竪穴建物北西部では貼床直上まで削平が及んでおり、埋土が確認できなかった。ＳＫ２、ＳＰ40に切られ、ＳＰ46、47を切る。

埋土は黒色極細砂である。埋土から須恵器坏蓋（９、10）、坏身（11～13）、土師器甑（14）貼床

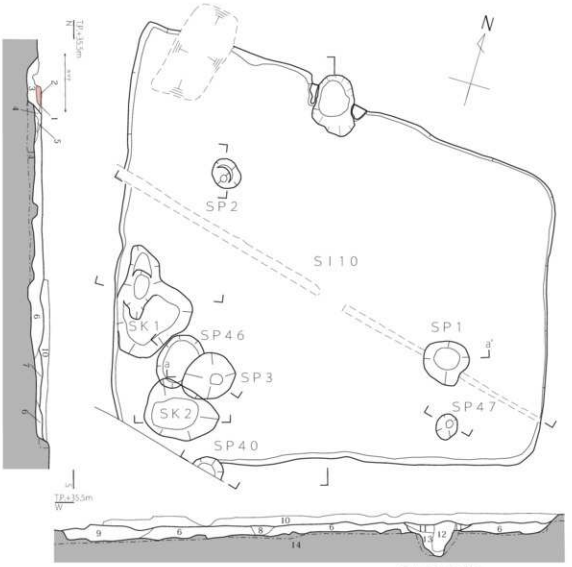
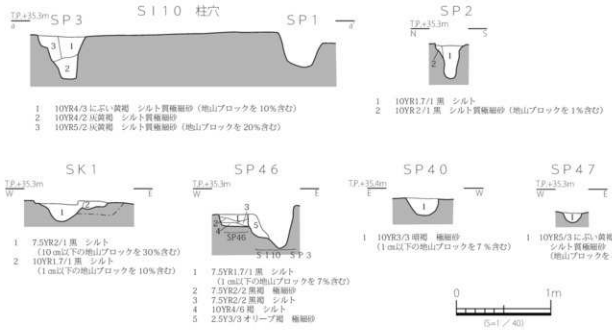


図13　ＳＩ10平・断面図



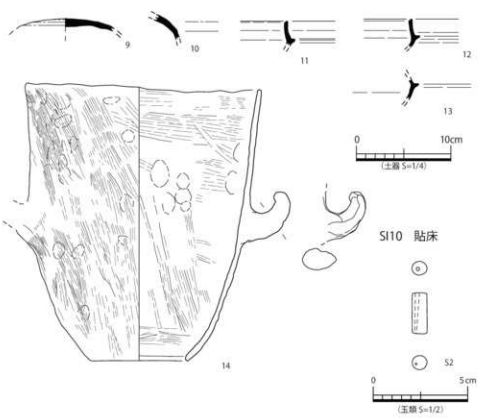


図 14　ＳＩ 10 内ピット断面図・出土遺物

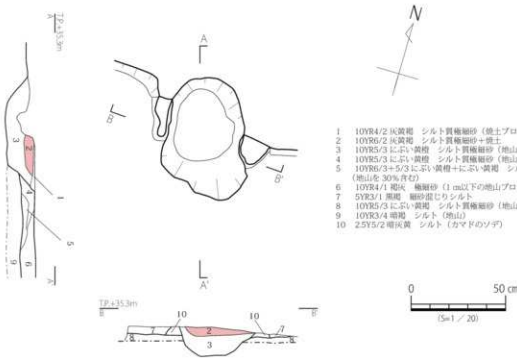


図 15　ＳＩ 10カマド平・断面図

から碧玉製管玉（Ｓ２）が出土した。

竪穴建物北壁中央にカマドが作りつけられている。カマドのソデは暗灰黄色シルトによって構築されている。カマド内部には、上半に焼土を含む灰黄褐色シルトが堆積し、下半ににぶい黄褐色シルトが堆積する。

貼床直上でＳＰ１～３、ＳＫ１を検出した。ただし、竪穴建物北西部では貼床直上まで削平が及んでいたことからＳＰ２の掘込み面は不明である。ＳＰ１、ＳＰ３は埋土除去後、貼床上で検出したことから竪穴建物の柱穴と考えられる。ＳＰ１、３は直径約 40 ～ 50㎝、深さ約 40㎝、ＳＰ２は直径約３0㎝、深さ約 30㎝を測る。ＳＰ１には直径約 20㎝の柱痕跡が残る。ＳＫ１の平面は長辺約 1.2 m、短辺 0.8 mの不定形を呈し、断面は西側が深くくぼむ。

貼床除去後にＳＰ 46、47 を検出した。ＳＰ 46 は直径約 50㎝、深さ約 40㎝、ＳＰ 47 は直径約 20㎝、深さ約 10㎝を測る。

遺構の時期は、出土遺物や建物主軸からＴＫ 23 ～ 47 型式併行期と考えられる。

ＳＩ 12

第３調査区北拡張区、第５調査区で検出した竪穴建物である。ＳＸ９に切られ、ＳＩ 14 を切る。主軸方位はＮ - 0°- Ｅであり、検出時の標高は 35.1 mである。東西２m以上、南北 2.5 m以上を測る。埋土の厚さ約 30㎝である。

埋土７層上面と地山上面で遺構検出を行い、地山上面でＳＰ 32 を検出した。ＳＰ 32 からは土師器片が出土しているが、小片のため図化していない。

遺構の時期は、以降の切り合い関係からＴＫ 217 型式併行期以前と考えられる。

ＳＩ 13

第１調査区、第３調査区北拡張区で検出した竪穴建物である。ＳＰ 30、ＳＩ 14 を切り、北東隅、南端は撹乱によって切られる。埋土は黒色極細砂である。南北 4.7m 以上、東西約 3.8m である。建物主軸はＮ - 15°- Ｅであり、検出レベルは約 35.1m である。埋土の厚さは約 10㎝である。

埋土１層から３層除去後、地山上面（４層上面）で遺構検出を行い、ＳＰ 30 を検出した。ＳＰ 30 は直径約 30㎝、深さ約 20㎝を測る。位置関係から、竪穴建物の柱穴である可能性は低いと考えられる。

埋土から土師器高坏（15）、須恵器坏身（16）、が出土している。遺構の時期は、切り合い関係から

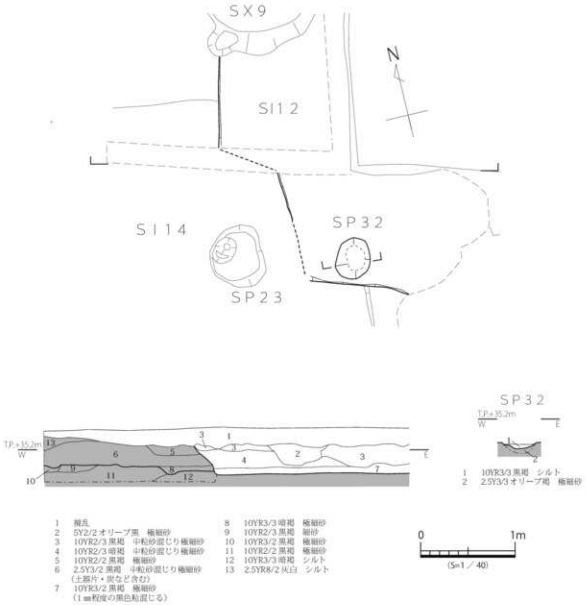


図16　ＳＩ12平・断面図

ＴＫ217型式併行期以前と考えられる。

ＳＩ14

第１調査区、第３調査区北拡張区、第５調査区で検出した竪穴建物である。ＳＩ12、ＳＩ13、撹乱に切られる。主軸方位はＮ-２°-Ｅであり、検出時の標高は35.1ｍである。東西４ｍ以上、南北５ｍ以上を測る。埋土の厚さ約10㎝、貼床の厚さは約８㎝である。遺構埋土は黒褐色、暗褐色を呈する極細砂である。

埋土掘削後、貼床直上で４基のピット（ＳＰ20、22、23、24）を検出した。また、南側の撹乱を除去した後にＳＰ21を検出した。規模と位置からＳＰ20、21、22、23がＳＩ14の柱穴であると考えられる。壁溝は建物東側の一部で確認されており、幅約10㎝、深さ約６㎝である。

遺構埋土から弥生土器または土師器の壺（17）、須恵器坏身（18、19）が出土している。遺構の時期は遺構の切り合い関係から、ＴＫ217型式併行期以前と考えられる。

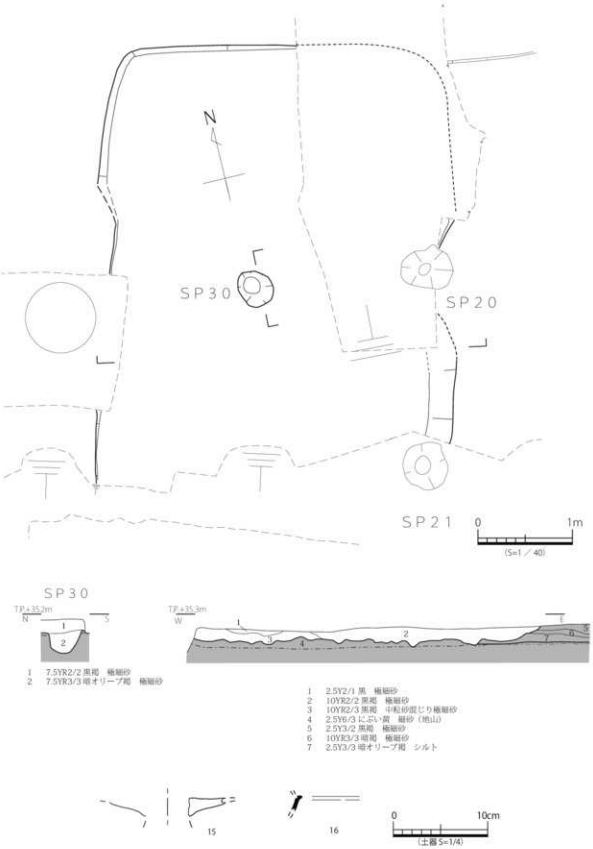


図17　ＳＩ 13 平・断面図・出土遺物

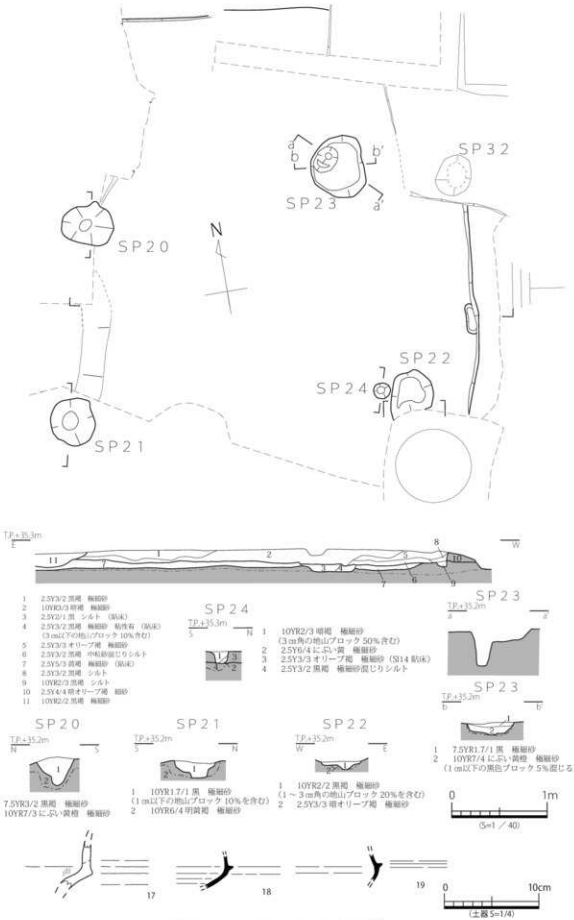
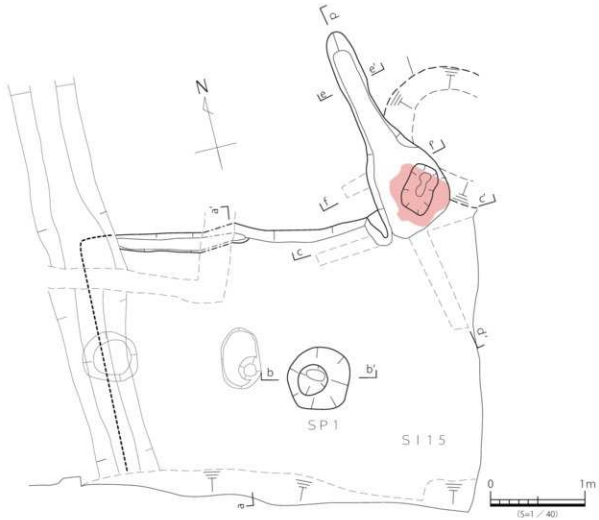


図 18　ＳＩ 14 平・断面図・出土遺物

ＳＩ15

第３調査区東拡張区南側で検出した竪穴建物である。竪穴建物西端をＳＤ１に切られ、ＳＩ16を切る。竪穴建物北壁でカマドを検出した。カマドが竪穴建物の中心部に位置すると仮定した場合、竪穴建物の東西の長さは６～７ｍとなる。主軸方位はＮ-10°-Ｅであり、検出時の標高は35.2ｍである。埋土の厚さは約10㎝、貼床の厚さは２～８㎝である。埋土は暗褐色中粒砂まじり極細砂である。埋土から須恵器坏蓋（20）、坏身（21～23）、須恵器坏（24）、須恵器甕（25）、臼玉（Ｓ３）、貼床から須恵器甕（26）が出土した。

竪穴建物北壁のカマドは奥壁が建物の外に突出しており、カマドから煙道が延びる。煙道は幅約15㎝、深さ20～30㎝、長さは約1.5ｍである。カマドのソデはにぶい黄褐色極細砂によって構築されてい



1　10YR3/3 暗褐　中粒砂混じり極細砂
2　10YR3/3 暗褐　中粒砂混じり極細砂
（1㎝以下の地山ブロックを15％含む）
3　10YR3/4 暗褐　シルト（攪混じる）

1　7.5YR4/3+10YR4/2 褐＋灰黄褐　シルト質極細砂
（地山ブロックを７％含む）
2　7.5YR4/2+10YR4/2 灰褐＋灰黄褐　シルト質極細砂
（地山ブロックを10％含む）

図19　ＳＩ15平・断面図

図 20　ＳＩ 15 カマド平・断面図

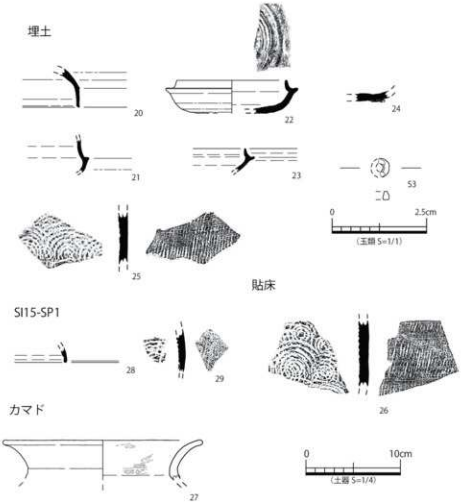


図21　ＳＩ15出土遺物

る。カマド内部では、下半に焼土層と炭層が互層状に堆積しており、当時の機能面であったと考えられる。上半の埋土には、カマド天井部の崩落土と考えられる白色粒が含まれる。埋土から土師器甕（27）が出土した。

貼床直上で遺構検出を行い、ＳＰ１、壁溝を検出した。ＳＰ１は直径約60㎝、深さ20㎝を測り、埋土から須恵器坏蓋（28）、須恵器甕（29）が出土した。壁溝は竪穴建物北側で検出されており幅約10㎝、深さ約10㎝を測る。

竪穴建物埋土、貼床、ＳＰ１埋土から出土した須恵器甕（25、26、29）は同一個体と考えられ、付近の遺構埋土を用いて貼床の構築、竪穴建物の埋戻しが行われたもの考えられる。

遺構の時期は、出土遺物や建物主軸からＴＫ43～209型式併行期と考えられる。

ＳＩ16

第３調査区南拡張区東端で検出した竪穴建物である。検出時の標高は約35.2ｍである。ＳＩ15、ＳＤ１に切られる。南北２ｍ以上、東西0.5ｍ以上を測る。埋土の厚さは２～３㎝程度、貼床の厚さは約10㎝である。

埋土掘削後、貼床直上で遺構検出を行った。ＳＩ15に切られる範囲では、ＳＩ15の掘方がＳＩ16の掘方と同じレベルに達することから、貼床が検出されなかった。ＳＩ15貼床上面では、壁溝とＳＰ１を検出した。ＳＰ２はＳＩ15の貼床除去後、地山上面で検出した。ＳＰ２がＳＩ16の柱穴であった場合、建物の東西方向の規模は東西３ｍ程度と推定される。壁溝は建物西側で検出されており、幅約20㎝、深さ約10㎝を測る。遺物は土師器片が出土しているが、小片のため図化していない。遺構の時期は、切り合い関係からＴＫ43～209型式併行期以前と考えられる。

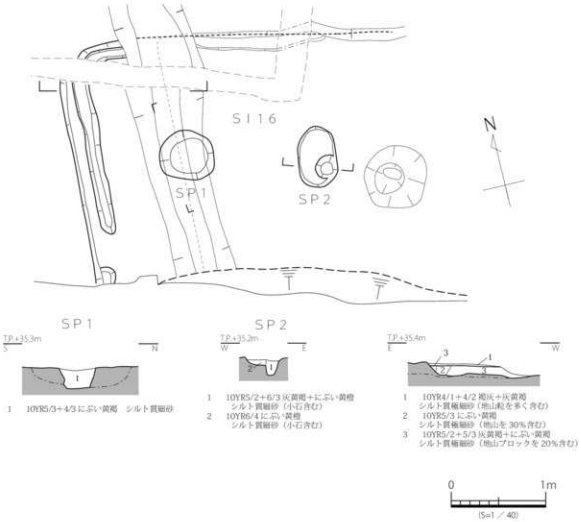


図22　ＳＩ16平・断面図

（2）掘立柱建物

ＳＢ２

第３調査区と第４調査区の境に位置する。２間×２間（3.9 m× 3.6 m）、面積 14.04 ㎡の総柱建物である。主軸方位はＮ - 5°- E、検出時の標高は約 35.2 mである。

ＳＰ 13～ＳＰ 17、50、52 の７基のピットで構成される。芯芯間距離は１～ 1.3 mである。建物西側は攪乱がおよび、北西隅と南西隅のピットは検出できなかった。ＳＰ 16、17 は直径 30 ～ 40㎝、深さ 10 ～ 20㎝、その他のピットは直径 40 ～ 60㎝、深さは 10 ～ 20㎝である。

遺物はＳＰ 13、14、15 から土師器片が出土しているが小片のため図化していない。時期は、各柱穴の出土遺物に須恵器が含まれないことから、古墳時代中期中葉頃と考えられる。

ＳＢ３

第４調査区北半、ＳＢ２北側に位置する。２間×２間（4.9 m× 4.6 m）、面積 22.5 ㎡の総柱建物である。主軸方位はＮ - 22°- W、検出時の標高は約 35.1 mである。

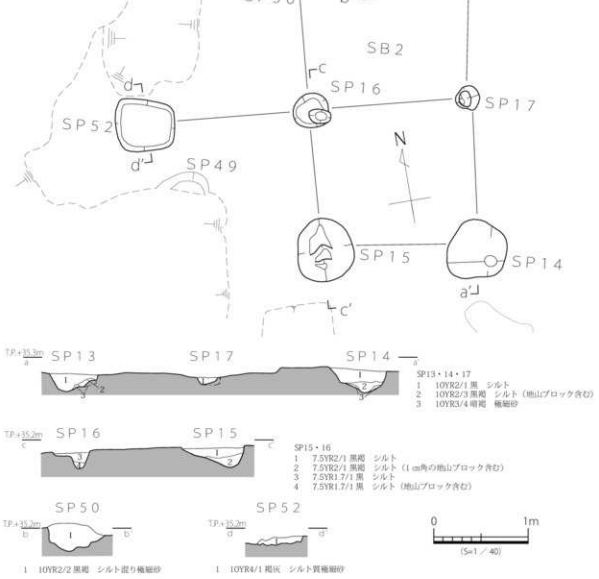


図 23　ＳＢ２平・断面図

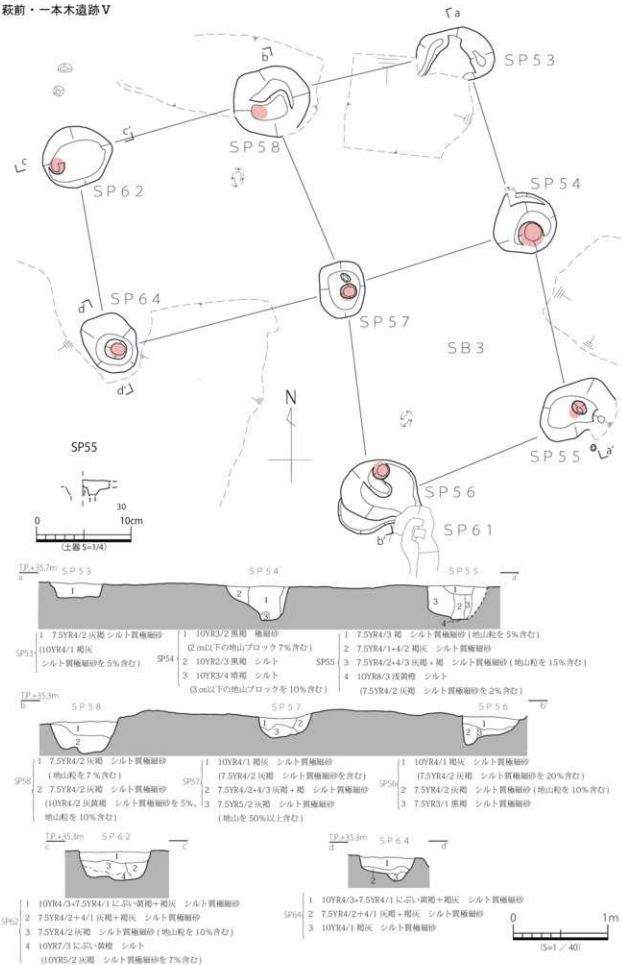


図 24　ＳＢ３平・断面図・出土遺物

ＳＰ 53 ～ 58、62、64 の８基のピットで構成される。芯芯間距離は 1.1 ～２mである。建物西側は攪乱がおよび、南西隅のピットは検出できなかった。各ピットの規模は直径 60 ～ 80cm程度、深さは 20 cm～ 40cm程度である。SP53 を除いた各ピットの底面で直径約 15cm程度の柱痕が確認された。

遺物はＳＰ 55 から土師器高坏（30）、須恵器片が出土した他、ＳＰ 53、54、56、58、62、64 から土師器片が出土しているが、多くは小片のため図化していない。

時期は土師器の含有量が多い点や建物主軸から、ＴＫ 23 ～ 47 型式併行期と考えられる。

ＳＢ４

第４調査区中央、ＳＢ３の南に位置する、１間×２間（３ｍ×５ｍ）、面積 15㎡の側柱建物である。主軸方位はＮ - 12°- W、検出時の標高は約 35.2 ｍである。ＳＢ３のＳＰ 56 を切る。

ＳＰ 59 ～ 61、66 の４基で構成される。芯芯間距離は約 1.4 ｍである。

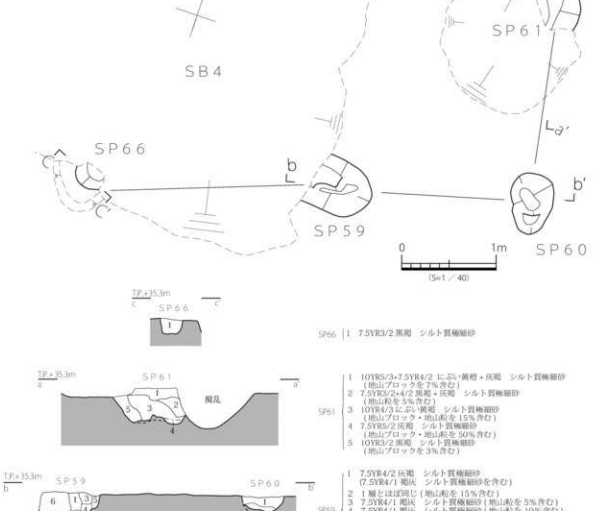


図 25　ＳＢ４平・断面図

遺物はＳＰ 59 から土師器片が出土しているが、小片のため図化していない。時期は建物主軸と遺物から、ＴＫ 23 ～ 47 型式併行期と考えられる。

（3）柵列

柵列１

第３調査区南端中央から第３調査区南拡張区で検出した東西５間、長さ約 8.8 ｍの柵列である。主軸方位はＮ - 89°- Ｅ、検出面の標高は約 35.2m である。

ＳＰ１～５、37 の６基で構成される。芯芯間距

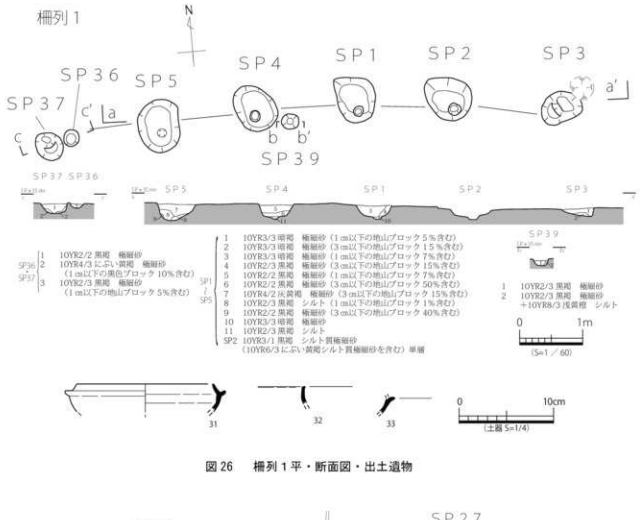


図 26　柵列１平・断面図・出土遺物

図 27　柵列２平・断面図

離は約１～1.2mを測る。ＳＰ36、39は上述したピット群と同列状に位置するが、隣接するピットとの距離が近く、柵列に伴うものであるか不明である。ＳＰ37は直径約40cm、深さ約10cm、その他のピットは直径60cm、深さ10～20cm程度を測る。ＳＰ１、２、４、５の底面には直径15～20cmの柱痕が残る。

遺物はＳＰ３から須恵器坏身（31）、ＳＰ５から須恵器坏身（32、33）が出土している。また、図化できなかったが、ＳＰ36から土師器片、ＳＰ１、２、５から土師器片と須恵器片が出土している。時期は出土遺物からＭＴ15～ＭＴ85型式併行期と考えられる。

柵列２

第３調査区東拡張区で検出した南北２間、長さ約3.6mの柵列である。ＳＩ８を切る。主軸方位はＮ-５°-Ｅ、検出面の標高は約35.2mである。

ＳＰ25、26、27の３基で構成される。芯芯間距離は約1.2mを測る。各ピットは直径40cm、深さ20cm程度である。

遺物はＳＰ26、27から土師器片、須恵器片が出土しているが、小片のため図化していない。時期は、切り合い関係からＴＫ217型式併行期以降と考えらえる。

（４）溝

ＳＤ１

第３調査区東側で検出した幅0.7～0.9m、深さ約20cm、長さ10m以上の溝である。主軸方位はＮ-４°-Ｅ、検出時の標高は約35.2mである。ＳＫ３、攪乱に切られ、ＳＩ15、16を切る。

理土から土師器甕（34）、土師器高坏（35、36）、土師器底部（37）、砥石（Ｓ４）の他、須恵器、土師器の小片が出土したが、小片のため図化していない。34、35は形態から古墳時代中期と考えられる。

遺構の時期に関して、本遺構からは古墳時代中期を中心とする遺物が出土しているが、ＳＤ１に切られるＳＩ15がＴＫ43～209型式併行期に比定されることから、当時期以降と考えられる。周辺の遺構を壊してＳＤ１に遺物が投棄されたと推定される。

図28　ＳＤ１平・断面図

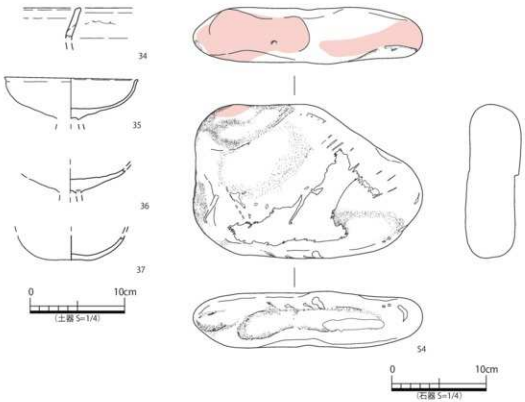


図 29　ＳＤ１出土遺物

（５）土坑

ＳＫ１

第３調査区の中央で検出した。北側の一部を攪乱に切られ、ＳＩ７を切る。検出面の標高は約 35.2m である。平面形状は楕円形で、長軸約 1.6m、短軸約 0.9m、深さ約 10㎝を測る。断面形状は浅い皿状である。

遺物は土師器、須恵器片が出土しているが、小片のため図化していない。時期は、切り合い関係からＴＫ 23 ～ 47 型式併行期以降と考えられる。

ＳＫ２

第３調査区南拡張区で検出した。ＳＩ 10 を切る。検出面の標高は約 35.2m である。 平面形は不整円形、断面形状は不整形である。長軸約 0.8m、短軸約 0.4m、深さ約 20㎝を測る。

埋土から土師器甕（38）、須恵器坏蓋（39）、須恵器甕（40）が出土した。時期は、出土遺物からＭＴ 15 ～ＭＴ 85 型式併行期と考えられる。

ＳＫ３

第３調査区の東側で検出した。ＳＤ１を切る。検出面の標高は約 35.2m である。 平面形状は不整楕円形で、長軸約 2.4m、短軸約 1.2m、深さ約 20㎝を測る。断面形状は方形である。

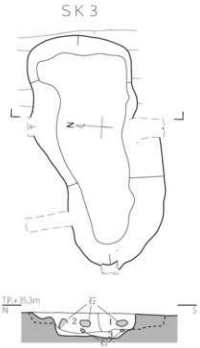
埋土から須恵器坏蓋（41）、須恵器壺（42）の他、土師器の小片が出土しているが、小片のため図化していない。時期は遺構の切り合い関係からＴＫ 43 ～ 209 型式併行期以降と考えられる。

ＳＫ４

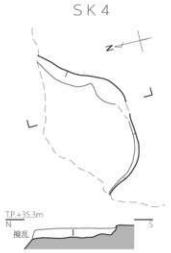
第３調査区の東側で検出した。北側を攪乱に切られる。検出面の標高は約 35.2m である。長軸約 1.6m 以上、短軸約１m 以上、深さ約 10㎝を測る。

1　7.5YR6/4 にぶい橙　シルト質極細砂

1　10YR3/2 黒褐　極細砂
（3 cm以下の地山ブロック 10%混じる）



1　10YR4/3＋7.5Y4/2 にぶい黄褐＋灰褐　シルト質極細砂
2　1 層とほぼ同じだが、シルト質極細砂が少ない
3　10YR4/3 にぶい黄褐　シルト質極細砂
（地山ブロックを 10%含む）



1　10YR4/3 にぶい黄褐　シルト質極細砂
＋10YR7/4 にぶい黄橙　シルト

1　7.5YR4/2＋10YR3/1
灰褐＋黒褐　シルト質極細砂

1　10YR3/1＋4/3 黒褐＋にぶい黄褐　シルト質極細砂
（地山ブロックを 5%含む）
2　1 層と同じだが、地山ブロックを 20%含む
3　10YR4/3 にぶい黄褐　シルト質極細砂

1　10YR2/2 黒褐　シルト質極細砂

1　10YR2/2 黒褐　シルト質極細砂

図 30　土坑平・断面図

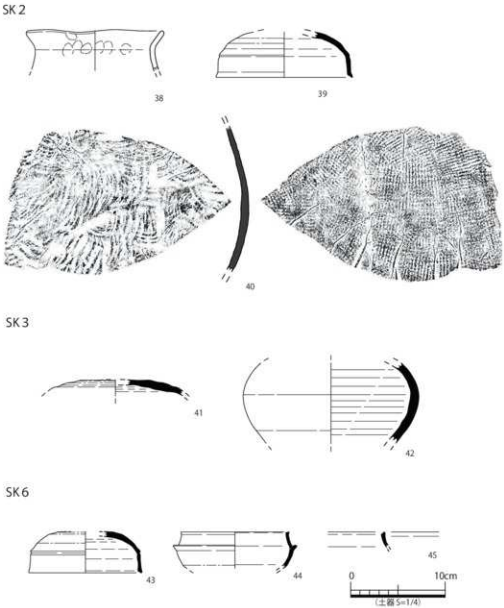


図31　土坑出土遺物

遺物は土師器片、須恵器片が出土しているが、小片のため図化していない。時期は不明である。

ＳＫ５

第３調査区の北東隅で検出した。西、南側を撹乱に切られる。検出面の標高は約 35.1m である。長軸約 0.6m 以上、短軸約 0.4m 以上、深さ約 10㎝以上を測る。

遺物は土師器片が出土しているが小片のため図化していない。時期は不明である。

ＳＫ６

第３調査区の中央で検出した。Ｓ１７に切られる。検出面の標高は約 35.2m である。平面形状は不整楕円形で、断面形状は北側が深くくぼむ。長軸約１m、短軸約 0.6m、深さ約 20㎝を測る。

埋土から須恵器坏蓋（43）、須恵器坏身（44、45）が出土した。時期は、出土遺物や遺構の切り合い関係からＴＫ 23 ～ 47 型式併行期と考えられる。

ＳＫ７

第３調査区東側で検出した。北側の一部を撹乱に切られる。検出面の標高は約 35.1m である。平面形状は楕円形、断面形状は歪な逆台形を呈する。長軸約 1.4m 以上、短軸約 0.8m 以上、深さ約 10㎝

を測る。遺物は土師器、須恵器片が出土しているが、小片のため図化していない。時期は不明である。

ＳＫ８

第３調査区西側で検出した。南側を撹乱に切られる。検出面の標高は約 35.2m である。長軸約 1.1m 以上、短軸約 0.8m 以上、深さ約５cmを測る。

遺物は出土していない。時期は不明である。

（６）性格不明遺構

ＳＸ１

第３調査区の北側で検出した。北西側を撹乱に切られ、全体形は不明である。ＳＰ６、10、ＳＸ２を切る。また、形状からＳＩ 13に切られていると考えられる。北東側には礫が集積する箇所があり、噴礫によって遺構の一部が壊されている可能性がある。検出面の標高は約 35.2 mである。長軸 4.8m 以上、短軸 3.4m 以上、深さ約 40cm以上を測る。

遺物は出土していない。時期は不明である。

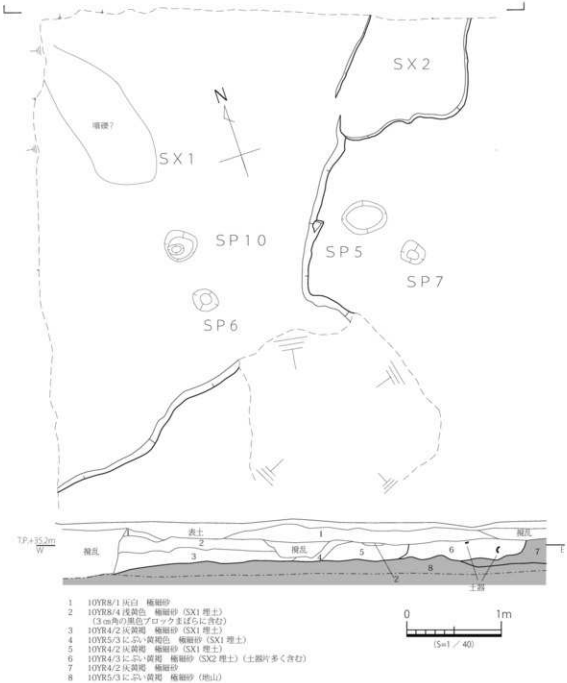


図 32　ＳＸ１・２平・断面図

ＳＸ２

第３調査区の北側で検出した。北から西側を攪乱、西側をＳＸ１に切られ、全体の形状は不明である。検出面の標高は 35.2m である。長軸 1.4m 以上、短軸１m 以上、深さ約 20cm以上を測る。

遺物は土師器片、須恵器片が出土したが小片のため図化していない。時期は不明である。

ＳＸ３

第３調査区の北側で検出した。北、東側を攪乱に切られる。形状から、Ｓ１14 に切られていると考えられる。全体の形状は不明である。また、遺構南東部には、噴礫または風倒木による落ち込みが確認された。検出面の標高は約 35.2m である。長軸 3.2m 以上、短軸 2.1m 以上、深さは約 30cm以上を測る。

遺物は須恵器坏身（46）、鉄器（Ｔ１）の他、須恵器片、土師器片が出土したが小片のため図化していない。遺構の時期は、切り合い関係からＴＫ 217 型式併行期以前と考えられる。

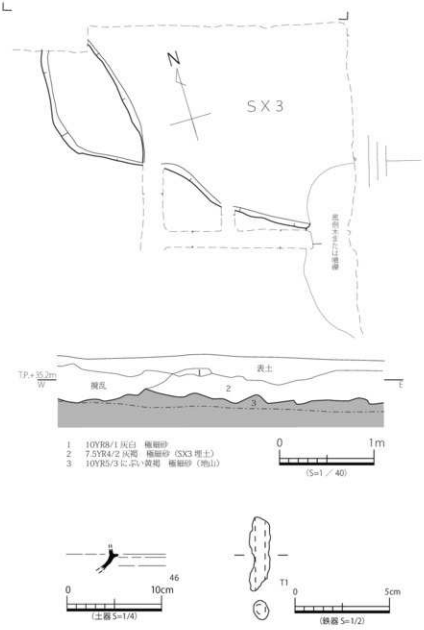


図 33　ＳＸ３平・断面図・出土遺物

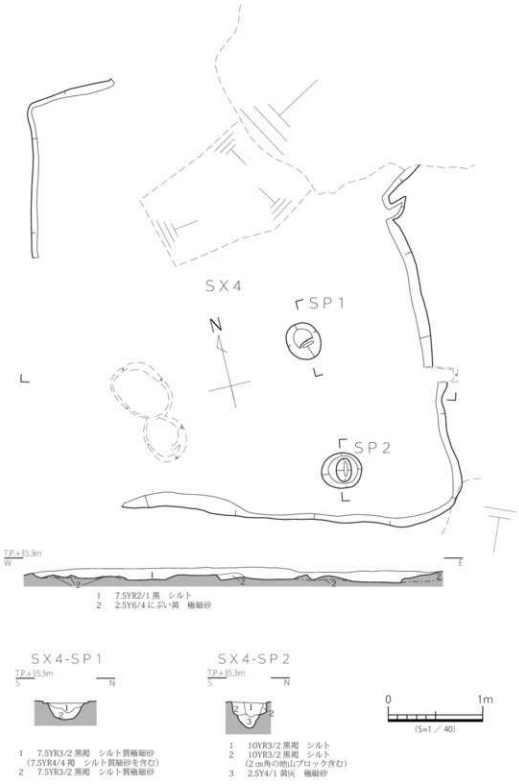
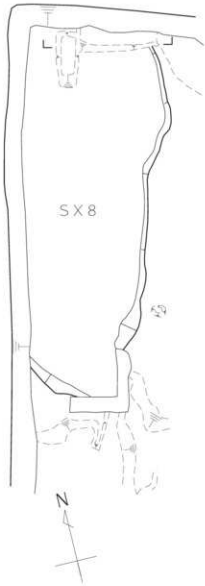

SX4
SP1
SP2
N
L
TP＋35.3m
W
E
1　7.5YR2/1 黒　シルト
2　2.5Y6/4 にぶい黄　極細砂
SX4-SP1
TP＋35.3m
S
N
1　7.5YR3/2 黒褐　シルト質極細砂
(7.5YR4/4 褐　シルト質細砂を含む)
2　7.5YR3/2 黒褐　シルト質極細砂
SX4-SP2
TP＋35.3m
S
N
1　10YR3/2 黒褐　シルト
2　10YR3/2 黒褐　シルト
(2cm角の地山ブロック含む)
3　2.5Y4/1 黄灰　極細砂
0
1m
(S=1／40)

図34　ＳＸ４平・断面図



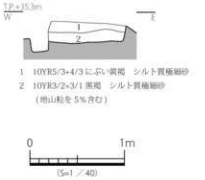


図35　ＳＸ８平・断面図

ＳＸ４

第３調査区中央西寄りで検出した。北側を攪乱に切られ、ＳＸ４-ＳＰ１、ＳＸ４-ＳＰ２を切る。遺構の北側、南西側では地山直上付近まで削平が及んでいたため、より北、東側に遺構が延びていた可能性がある。検出時の標高は 35.2m である。長軸約 4.5m、短軸約 3.6m、深さ約 10㎝を測る。

遺物は埋土から土師器片、須恵器片が出土したが小片のため図化していない。時期は不明である。

ＳＸ８

第４調査区の北西隅で検出した落込み状の遺構である。北、西側が調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。検出面の標高は 35.1m である。長軸 3.8m 以上、短軸 1.4m 以上、深さ約 20㎝以上を測る。

遺物は土師器片、須恵器片が出土したが小片のため図化していない。遺構の時期は不明である。

ＳＸ９

第５調査区の北東隅で検出した。北、西側が調査区外に延び、全体の形状は不明である。検出面の標高は 35.1 ～ 35.0m である。長軸 3.6m 以上、短軸 1.4m 以上、深さ約 10㎝以上を測る。

遺物は須恵器甕（47）、土師器甕（48）の他、土師器片が出土したが小片のため図化していない。時期は出土遺物から、ＴＫ 217 型式併行期と考えられる。

（７）ピット

検出したピットの平・断面図を図 38 に掲載した。遺物は、ＳＰ４から須恵器坏蓋（49）、須恵器甕（50）が出土している。遺構の時期は、出土遺物からＴＫ 23 ～ 47 型式併行期以降と考えられる。

（８） 遺構外出土遺物

重機掘削中や遺構面等から出土し、帰属不明確な遺物や、整理作業の進捗に伴い、遺構出土遺物として取り扱うことが困難となった資料である（図 39）。個々の資料の特徴については、観察表を参照していただきたい。

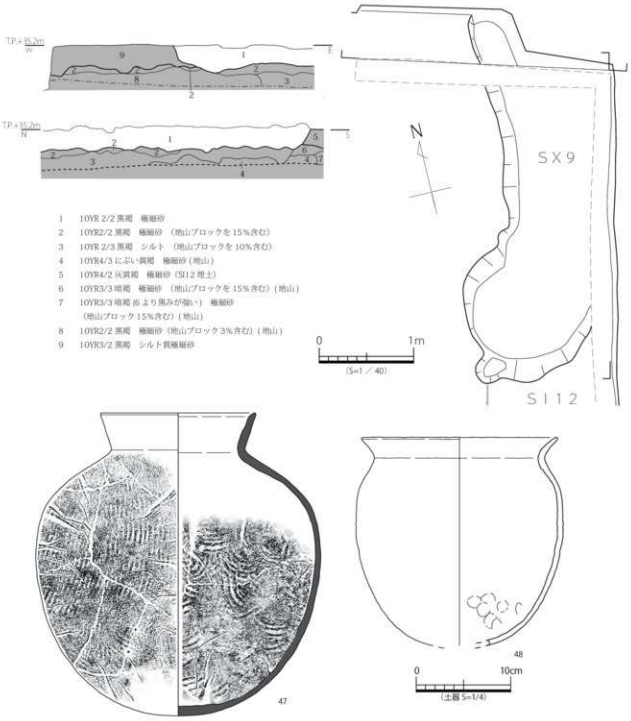


図 36　ＳＸ９平・断面図・出土遺物

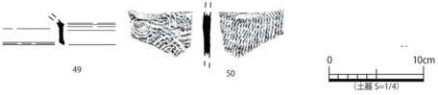


図 37　ＳＰ４出土遺物

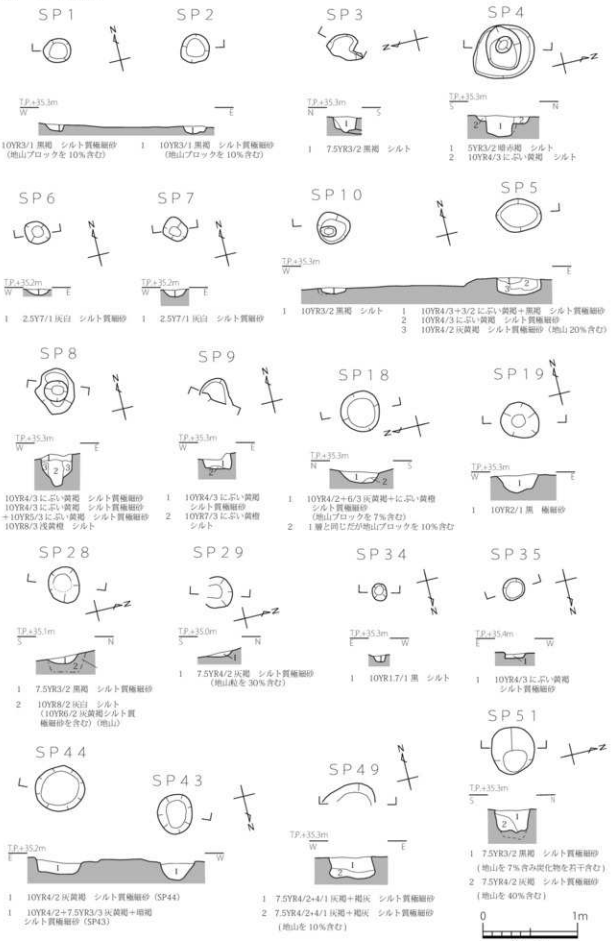

SP1
TP.+35.3m
W
E
1 10YR3/1 黒褐 シルト質極細砂
(地山ブロックを 10%含む)
SP2
TP.+35.3m
W
E
1 10YR3/1 黒褐 シルト質極細砂
(地山ブロックを 10%含む)
SP3
TP.+35.3m
N
S
1 7.5YR3/2 黒褐 シルト
SP4
TP.+35.3m
S
N
1 5YR3/2 暗赤褐 シルト
2 10YR4/3 にぶい黄褐 シルト
SP6
TP.+35.2m
W
E
1 2.5Y7/1 灰白 シルト質細砂
SP7
TP.+35.2m
W
E
1 2.5Y7/1 灰白 シルト質細砂
SP10
TP.+35.3m
W
E
1 10YR3/2 黒褐 シルト
SP5
TP.+35.3m
W
E
1 10YR4/3+3/2 にぶい黄褐+黒褐 シルト質極細砂
2 10YR4/3 にぶい黄褐 シルト質極細砂
3 10YR4/2 灰黄褐 シルト質極細砂(地山 20%含む)
SP8
TP.+35.3m
W
E
1 10YR4/3 にぶい黄褐 シルト質極細砂
2 10YR4/3 にぶい黄褐 シルト質極細砂
+10YR5/3 にぶい黄褐 シルト質極細砂
3 10YR8/3 浅黄橙 シルト
SP9
TP.+35.3m
W
E
1 10YR4/3 にぶい黄褐
シルト質極細砂
2 10YR7/3 にぶい黄橙
シルト
SP18
TP.+35.3m
N
S
1 10YR4/2+6/3 灰黄褐+にぶい黄橙
シルト質極細砂
(地山ブロックを 7%含む)
2 1 層と同じだが地山ブロックを 10%含む
SP19
TP.+35.3m
W
E
1 10YR2/1 黒 極細砂
SP28
TP.+35.1m
S
N
1 7.5YR3/2 黒褐 シルト質極細砂
2 10YR8/2 灰白 シルト
(10YR6/2 灰黄褐シルト質
極細砂を含む)(地山)
SP29
TP.+35.0m
S
N
1 7.5YR4/2 灰褐 シルト質極細砂
(地山粒を 30%含む)
SP34
TP.+35.3m
E
W
1 10YR1.7/1 黒 シルト
SP35
TP.+35.4m
E
W
1 10YR4/3 にぶい黄褐
シルト質極細砂
SP44
TP.+35.2m
E
W
1 10YR4/2 灰黄褐 シルト質極細砂(SP44)
1 10YR4/2+7.5YR3/3 灰黄褐+暗褐
シルト質極細砂(SP43)
SP43
SP49
TP.+35.3m
W
E
1 7.5YR4/2+4/1 灰褐+褐灰 シルト質極細砂
2 7.5YR4/2+4/1 灰褐+褐灰 シルト質極細砂
(地山を 10%含む)
SP51
TP.+35.3m
S
N
1 7.5YR3/2 黒褐 シルト質極細砂
(地山を 7%含み炭化物を若干含む)
2 7.5YR4/2 灰褐 シルト質極細砂
(地山を 40%含む)
0
1m
(S=1/40)

図 38　ピット平・断面図

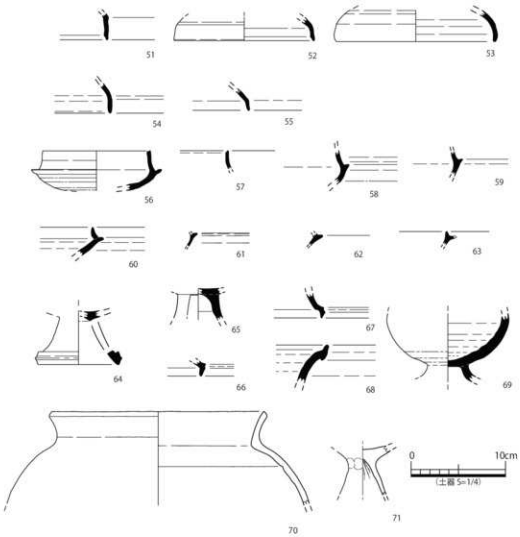

51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
0
10cm
(土器 S=1/4)

図 39　遺構外出土遺物

第Ⅲ章　まとめ

第１節　調査成果の概要

今回の調査では、竪穴建物７棟、掘立柱建物３棟を検出し、集落に付随する柵列、溝、土坑、柱穴等を確認した。遺構の時期は古墳時代中期中葉～飛鳥時代である。一連の調査で明らかになった竪穴建物の総数は 167 棟、掘立柱建物は 74 棟を数える。

また、今回の調査地の南部に隣接するⅠ - １調査区では、区画溝 14･27 - ＳＤ 70 が検出されている。この溝の性格に関しては、首長居館を方形に区画する溝と考えられている（高松市教育委員会 2017）。

今回の調査では、その南北及び東西の延長部はみられなかった。また、工事立会において敷地南側の擁壁部分を調査した際にも溝の延長は検出されていない（図 40）。Ⅰ - １調査区での竪穴建物の密集状況も考慮すると、今回の調査地よりも北側に溝の延長が存在する可能性が高いものと考えられる。

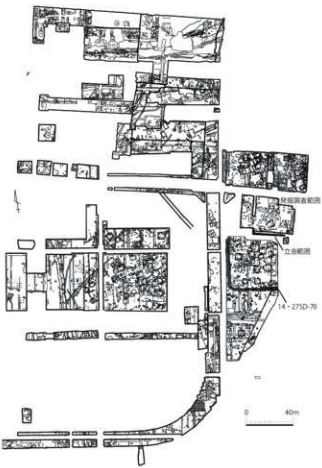


図 40　発掘調査及び工事立会の範囲

第２節　集落の変遷

次に、今回の調査成果を踏まえて集落の変遷を概観する。萩前･一本木遺跡では既存の調査成果から、次のとおり時期区分されている。

Ⅰ期：古墳時代中期中葉～中期後半
（須恵器出現以前～ＴＫ 208）
Ⅱ期：古墳時代中期後半～中期末
（ＴＫ 23 ～ＴＫ 47）
Ⅲ期：古墳時代後期初頭～後期前半
（ＭＴ 15 ～ＭＴ 85）
Ⅳ期：古墳時代後期中葉～後期末
（ＴＫ 43 ～ＴＫ 209）
Ⅴ期：飛鳥時代（ＴＫ 217 ～ＴＫ 46）
Ⅵ期：古代
Ⅶ期：中世

今回の調査ではⅠ～Ⅴ期の遺構が検出されたため、当該時期に絞って集落変遷を概観する。古代、中世の様相に関しては、既往の報告書（高松市教委 2021）を参照されたい。また、遺跡内では過去の調査で手工業生産関連遺物が出土しており（高松市教育委員会 2022）、それらの分布状況も示しつつ、集落変遷を概観する。分布図の作成に当たっては、時期比定が可能な遺構から出土した遺物を対象として、分布を示している。また、遺構に時期幅がある場合は、重複して分布を示している。手工業生産関連遺物の内訳は鍛冶関連遺物（鉄滓約 760 ｇ、鞴羽口片４点）、玉未成品（碧玉製管玉１点、滑石製管玉１点）、生産関連遺構は未確認である。現状の調査成果からみると、遺跡内で行われていた生産活動は比較的小規模なものであったと考えられる。

【Ⅰ期：古墳時代中期中葉～中期後半】

Ⅰ期は、萩前・一本木遺跡の集落の開始期に相当する。今回の調査では、掘立柱建物１棟が確認された。この時期の竪穴建物数は 10 棟程度、掘立柱建物は３棟程度である。当該時期には、３棟程度の竪穴建物で構成される居住域がⅠ - ３調査区、Ⅰ - １調査区、Ⅱ - ３～Ⅱ - ４調査区の３か所で確認される。以降も３か所の居住域の周辺で竪穴建物数が増加していく。Ⅰ - １調査区の竪穴建物では鉄滓が出土しているが、埋土最上層から出土した小片であり、混入品と考えられる。

【Ⅰ期：古墳時代中期中葉～中期後半】

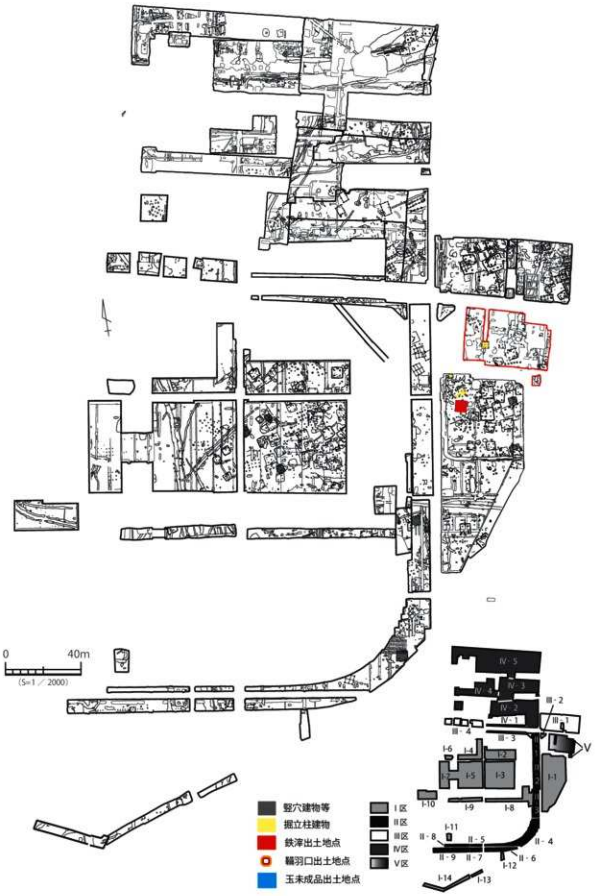


図41　遺構変遷図①

【Ⅱ期：古墳時代中期後半～中期末】

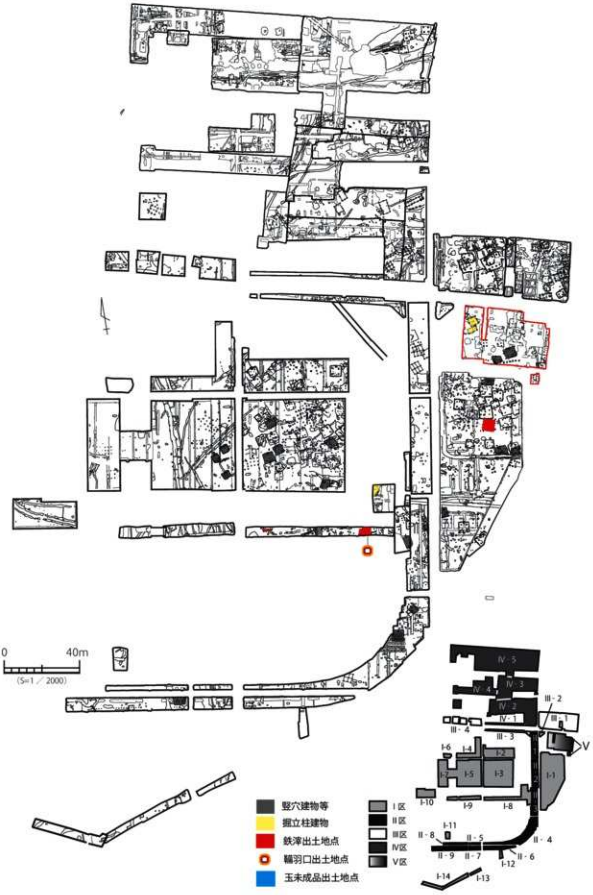


図 42　遺構変遷図②

【Ⅲ期：古墳時代後期初頭～後期前半】

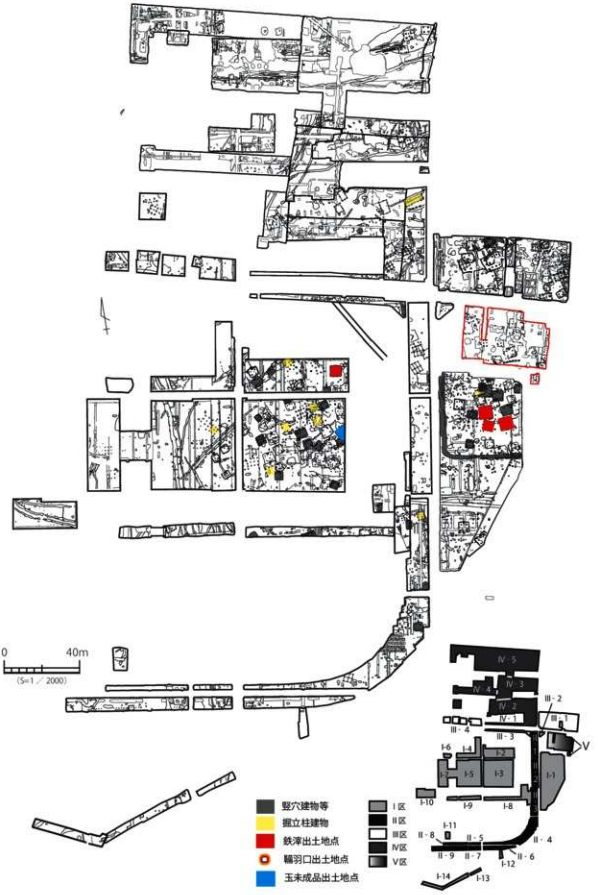


図 43　遺構変遷図③

【Ⅳ期：古墳時代後期中葉～後期末】

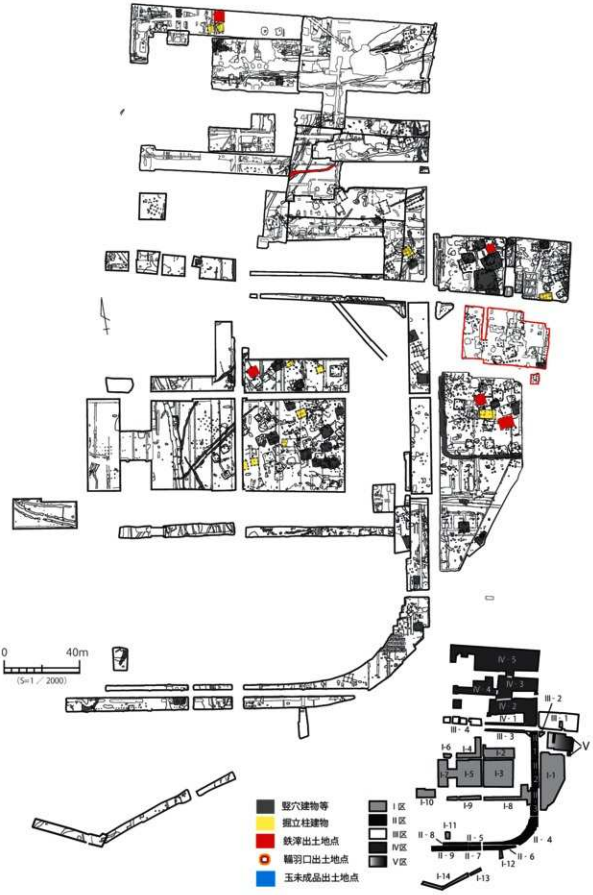


図 44　遺構変遷図④

【Ⅴ期：飛鳥時代】

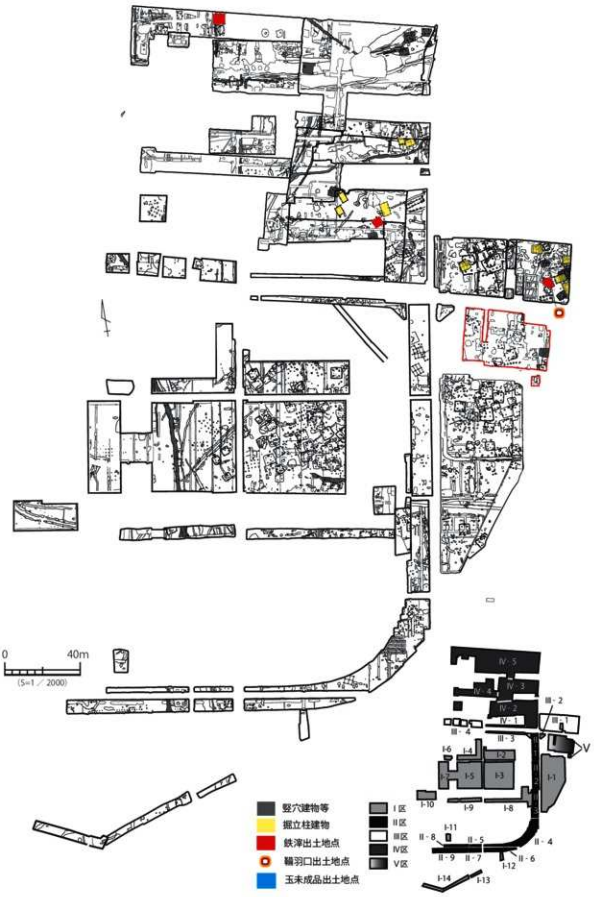


図 45　遺構変遷図⑤

【Ⅱ期：古墳時代中期後半～中期末】

Ⅱ期は萩前・一本木遺跡の拡大期に相当する。今回の調査では、竪穴建物２棟、掘立柱建物２棟、土坑１基が確認された。これまでの調査成果と合わせると、竪穴建物 20 棟以上、掘立柱建物３棟程度を数える。前段階で確認した３地点の居住域とほぼ同じ範囲で、６～８棟程度の竪穴建物のまとまりが確認される。また、当該時期には、鉄滓、鞴羽口等、鍛冶に関連する遺物がⅠ-８調査区、Ⅰ-１調査区散見されており、集落内で鍛冶が行われ始めたとみられる。

【Ⅲ期：古墳時代後期初頭～後期前半】

Ⅲ期は、拡大期～最盛期である。今回の調査では、柵列１基、土坑１基を確認した。これまでの調査成果と合わせると、竪穴建物約 40 棟、掘立柱建物約 10 棟を数える。当該期には、前段階までみられた３か所の居住域に加え、Ⅲ-１調査区でも少数の竪穴建物が確認されるようになる。また、区画溝内部の竪穴建物は区画溝と同じ主軸をとる。また、この時期にはⅠ-１調査区、Ⅰ-２調査区で鉄滓、Ⅰ-３調査区で玉未成品が確認されており、複合的な生産活動が行われるようになる。集落の拡大期であることと併せて考えると、集落の経済基盤の１つとして、鍛冶や玉作が行われていた可能性がある。

【Ⅳ期：古墳時代後期中葉～後期末】

Ⅳ期は集落の最盛期に該当する。今回の調査では、竪穴建物１棟を確認した。これまでの調査成果と合わせると、竪穴建物 45 棟程度、掘立柱建物 15 棟程度となる。この時期には、集落北側に居住域が拡大する。特に、Ⅲ-１調査区で竪穴建物が密集して存在し、それまで居住遺構が確認されていなかったⅣ区でも竪穴建物が確認されるようになる。また、手工業生産関連遺物も集落北側に分布するようになり、Ⅲ-１調査区、Ⅳ-２調査区、Ⅳ-５調査区で鉄滓が確認されている。

なお、遺跡周辺では当該時期に古墳の築造数が急速に増加し、２km 程度の位置に舟岡古墳、万塚古墳、住蓮寺池古墳、雨山古墳群、３km 程度の位置に平石上古墳、八王子古墳、石舟池古墳群、剣山古墳等が築かれる。距離的にも近く、遺跡の最盛期とも重なっていることから、これらの古墳のいずれか、または複数が萩前・一本木遺跡に対応する可能性がある。

【Ⅴ期：飛鳥時代】

Ⅴ期は集落の衰退期に該当し、区画溝が埋没し、竪穴建物数が減少する。今回の調査では、竪穴建物１棟、性格不明遺構１基を確認した。これまでの調査成果と合わせると、竪穴建物７棟程度、掘立柱建物５棟程度となる。手工業生産関連遺物は、鉄滓、鞴羽口がⅢ-１調査区、Ⅳ-３調査区で検出されている。鍛冶関連遺物は全時期の遺構で確認され、また、時期によって分布域が異なることから、集落内を移動しながら小規模な鍛冶が継続して行われていたと考えられる。

当該時期以降には溝状遺構が多くみられるようになる。Ⅳ-５調査区では、南海道推定ラインに平行する２本の溝（17-ＳＤ５・20-ＳＤ 25 ／ 21-ＳＤ 19）が確認されている。両溝の間隔は、県内の道路状遺構と同じ約９m を測り、時期はこれらと同じ７世紀後半以降と評価されている（高松市教育委員会 2021）。

古代官道と古墳時代集落の立地が重なる点からは、交通の要衝を選んで古墳時代集落が形成された可能性や古墳時代集落がその後の地域開発の拠点となった可能性が示唆される。周辺での調査事例の蓄積が期待される。

＜参考文献＞

高松市教育委員会 2017『萩前・一本木遺跡Ⅰ』
高松市教育委員会 2021『萩前・一本木遺跡Ⅳ』
高松市教育委員会 2022『むかしの高松』第 34 号

表１　観察表（土器）①

遺物番号	層位番号	出土遺構	種別器種	口径 底径 器高	形態の特徴 手法の特徴[外]|[内]	色調[外]|[内] 胎土 焼成	備考
1	10	**S17埋土（南東部）**	須恵器 壺	16.3 – – (4.0)	[外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]N6/灰 [内]10YR6/1褐灰 骨:1mm以下の長石含む 良	
2	10	S17埋土（南東部）	須恵器 坏蓋	– – – (2.0)	[外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]5Y7/1灰白 [内]2.5Y6/1黄灰 骨:1mm以下の石英・長石・黒色粒・赤色粒含む 良	
3	10	**S17貼床**	須恵器 坏身	– – – (1.2)	[外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]N4/灰 [内]N6/灰 骨:2mm以下の長石含む 良	
4	10	S17貼床（南西部）	須恵器 鉢	(9.4) – – (5.1)	[外]回転ナデ、突帯2条、櫛描波状文 [内]回転ナデ	[外]N5/灰 [内]N6/灰 骨:1mm以下の石英・長石・角閃石含む 良	
5	11	S17カマド	土師器 甕	– – (11.0) (21.7)	[外]ナデ、指頭圧痕、ハケ目 [内]指頭圧痕、粘土痕跡、ヘラケズリ	[外]10YR6/3にぶい黄橙 [内]10YR7/3にぶい黄橙 骨:4mm以下の石英・長石・赤色粒含む 良	
6	11	S17カマド	土師器 甕	26.1 – – (20.3)	[外]板ナデ、縦ナデ、ナデ、ハケ、指おさえ [内]ヘラケズリ、ナデ	[外]10YR7/3にぶい黄橙 [内]7.5YR7/3にぶい橙 骨:2mm以下の石英・長石・黒色粒含む 良	
7	12	S18埋土	須恵器 坏蓋	– – – (2.05)	[外]回転ナデ、回転ヘラケズリ [内]回転ナデ	[外]7.5Y5/1灰 [内]N6/灰 骨:3mm以下の石英、2mm以下の砂粒含む 良	
8	12	S18埋土	須恵器 鉢	– – (9.0) (2.5)	[外]回転ヘラケズリ [内]回転ナデ	[外]N6/灰 [内]N6/灰 骨:1mm以下の石英・長石・黒色粒含む 良	
9	14	S10埋土	須恵器 坏蓋	– – 6.8 (1.3)	[外]回転ケズリ [内]回転ナデ	[外]2.5Y6/1黄灰 [内]10YR7/1灰白 骨:1mm以下の長石含む 不良	
10	14	S10埋土	須恵器 坏蓋	– – – (3.5)	[外]回転ヘラケズリ、回転ナデ [内]回転ナデ	[外]10YR4/1褐灰 [内]10YR4/1褐灰 骨:3mm以下の長石含む 良	
11	14	S10埋土	須恵器 坏身	– – – (2.6)	[外]回転ナデ [内]回転ナデ	**[外]N7/灰白 [内]N7/灰白 骨:1mm程度の石英・長石・黒色粒含む 良**	
12	14	S10埋土	須恵器 坏身	– – – (3.0)	[外]回転ナデ [内]回転ナデ	**[外]N7/灰白 [内]N7/灰白 骨:1mm以下の石英・長石含む 良**	
13	14	S10埋土	須恵器 坏身	– – – (2.4)	[外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]2.5Y5/1黄灰 [内]10YR5/1褐灰 骨:2mm以下の長石・赤色粒含む 良	
14	14	S10埋土	土師器 甕	24.4 10.2 29.3	[外]縦ナデのち粗いハケ目、指ナデ、指頭圧痕、粗いハケ目 [内]粗いハケ目、粗いハケ目のち指頭圧痕、指ナデのち横方向のハケ目	[外]7.5YR7/6橙 [内]5YR7/6橙 骨:3mm以下の長石、5mm以下の石英含む 良	
15	17	S13埋土	土師器 高杯	– – (1.9)	[外]ナデ [内]—	[外]7.5YR7/6橙 [内]5YR6/6橙 骨:3mm以下の石英、4mm以下の長石含む 良	
16	17	S13埋土	須恵器 坏身	– – (1.6)	[外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]N4/灰 [内]N5/灰 骨:1mm以下の石英・長石・黒色粒含む 良	
17	18	S14埋土	弥生土器または土師器 壺	– – (5.1)	[外]ナデ [内]ハケ目	[外]7.5YR5/6明褐 [内]7.5YR6/6橙 骨:3mm以下の長石・赤色粒、8mm以下の砂粒含む 良	複合痕有
18	18	S14埋土	須恵器 坏身	– – (3.3)	[外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]N6/灰 [内]N6/灰 骨:2mm以下の石英・長石・黒色粒含む 良	
19	**18**	S14埋土	**須恵器 坏身**	**– – (2.9)**	**[外]回転ナデ [内]回転ナデ**	**[外]N5/灰 [内]7.5Y5/1灰 骨:1mm以下の長石・赤色粒・砂粒含む 良**	
20	21	S15埋土	須恵器 坏蓋	– – (4.05)	[外]回転ナデ、回転ヘラケズリ [内]回転ナデ	[外]N7/灰白 [内]N7/灰白 骨:1mm程度の石英・長石・黒色粒含む 良	

表２　観察表（土器）②

遺物番号	挿図番号	出土遺構	種別器種	口径 器高 底径	形態の特徴 手法の特徴[外][内]	色調[外][内] 胎土 焼成	備考
21	21	SI15埋土	須恵器 坏身	－ － [3.5]	[外]回転ナデ，回転ヘラケズリ [内]回転ナデ	[外]N5/灰 [内]2.5Y5/1黄灰 精良 0.5mm以下の石英・長石・赤色粒・黒色粒含む 良	
22	21	SI15埋土	須恵器 坏身	13.2 － [3.5]	[外]回転ヘラケズリ，回転ナデ [内]回転ナデ	[外]N6/灰 [内]N6/灰 密 1mm程度の砂粒含む 良	
23	21	SI15埋土	須恵器 坏身	－ － [2.4]	[外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]5Y5/1灰 [内]5Y6/1灰 密 1mm以下の石英・長石・黒色粒・赤色粒・金雲母含む 良	
24	21	SI15埋土	須恵器 坏	－ － [1.3]	[外]回転ナデ，回転ヘラケズリ [内]回転ナデ	[外]N6/灰 [内]N6/灰 密 2mm以下の石英・長石・角閃石含む 良	
25	21	SI15埋土	須恵器 壺	－ － [5.4]	[外]タタキのちハケ [内]タタキ(青海波文)	[外]N7/灰白 [内]10YR7/1灰白 密 1mm以下の石英・長石・黒色粒・赤色粒含む 良	
26	21	SI15貼床	須恵器 壺	－ － [6.9]	[外]回転ナデ(タタキ痕あり) [内]タタキ(青海波文)	[外]N7/灰白 [内]N7/灰白 密 3mm以下の石英・長石・角閃石・黒色粒含む 良	
27	21	SI13 カマド	土師器 甕	20.6 － [4.2]	[外]ナデ [内]ハケ目	[外]10YR6/6明黄褐 [内]10YR6/6明黄褐 密 2mm以下の赤色粒・砂粒，3mm以下の長石，6mm以下の石英含む 良	
28	21	SI15-SP1	須恵器 坏蓋	－ － [1.5]	[外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]N6/灰 [内]N6/灰 密 1mm以下の石英・長石・角閃石含む 良	
29	21	SI15-SP1	須恵器 壺	－ － [4.5]	[外]なし [内]タタキ(青海波文)	[外]10YR6/1褐灰 [内]2.5Y6/1黄灰 密 1mm以下の石英・長石含む 良	
30	**24**	**SB3-SP55**	**土師器 高坏**	**－ － [1.7]**	**[外]－ [内]放り目**	**[外]7.5YR6/6明橙 [内]7.5YR4/1褐灰 密 1mm以下の赤色粒含む 良**	
31	26	稀刊1-SP3	須恵器 坏身	(14.5) － [2.9]	[外]回転ナデ，自然釉付着 [内]回転ナデ	[外]2.5Y6/1黄灰 [内]2.5Y6/1黄灰 密 2mm以下の石英・長石・黒色粒含む 良	
32	26	稀刊1-SP5	須恵器 坏身	－ － [1.85]	[外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]2.5Y6/1黄灰 [内]2.5Y6/1黄灰 密 1mm以下の石英・長石含む 良	
33	26	稀刊1-SP5	須恵器 坏身	－ － [2.0]	[外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]N6/灰 [内]N6/灰 精良 1mm以下の石英・長石・角閃石含む 良	
34	29	SD1	土師器 甕	－ － [3.4]	[外]－ [内]－	[外]7.5YR5/6明褐 [内]7.5YR5/6明褐 密 3mm以下の長石・砂粒，1mm程度の角閃石含む 良	
35	29	SD1	土師器 高坏	(14.2) － [4.5]	[外]－ [内]－	[外]5YR6/6橙 [内]10YR7/4にぶい黄橙 密 2mm以下の長石，3mm以下の砂粒，4mm以下の石英含む 良	坏部ほぼ完形
36	29	SD1	土師器 高坏	－ － [2.7]	[外]－ [内]－	[外]5YR6/6橙 [内]7.5YR7/4にぶい橙 密 4mm以下の長石・石英・赤色粒含む 良	
37	29	SD1	土師器 壺か鉢	－ (4.0) [2.5]	[外]－ [内]－	[外]7.5YR5/6明褐 [内]10YR6/4浅黄橙 密 4mm以下の石英，2mm以下の赤色粒・砂粒含む 良	
38	31	SK2	土師器 甕	(14.2) － [4.25]	[外]ナデ，強調圧痕のちナデ [内]指頭圧痕	[外]7.5YR5/4にぶい褐 [内]10YR6/3浅黄橙 密 4mm以下の石英・長石・金雲母含む 良	
39	31	SK2	須恵器 坏蓋	14.4 － [4.8]	[外]回転ヘラケズリ，回転ナデ [内]回転ナデ	[外]N6/灰 [内]N6/灰 密 2mm以下の長石・赤色粒含む 良	
40	31	SK2	須恵器 壺	－ － [15.4]	[外]タタキ(格子状) [内]指ナデ，青海波	[外]2.5Y8/2灰白 [内]2.5Y8/2灰白 密 3mm以下の長石含む 不良	

表 3　観察表（土器）③

遺物番号	検図番号	出土遺構	種別器種	口径 底径 器高	形態の特徴 手法の特徴[外]:[内]	色調[外]:[内] 胎土 焼成	備考
41	31	SK3	須恵器 坏蓋	- - [1.7]	[外]回転ヘラケズリ、回転ナデ [内]回転ナデ	[外]N6/:灰 [内]N7/:灰白 普:2mm以下の石英・長石・黒色粒含む 良	
42	31	SK3	須恵器 蓋	- - [8.5]	[外]回転ナデのちナデ [内]回転ナデ	[外]N6/:灰 [内]N7/:灰白 普:3mm以下の石英・長石・黒色粒含む 良	
43	31	SK8(貯蔵)	須恵器 坏蓋	[12.0] - [4.35]	[外]回転ヘラケズリ、回転ナデ、凹線 [内]回転ナデ、凹線	[外]2.5Y8/1:黄灰 [内]N6/:灰 普:1mm以下の石英・長石・黒色粒・赤色粒含む 良	
44	**31**	**SK8(貯蔵)**	**須恵器 坏身**	**11.4 - 3.9**	**[外]回転ナデ、回転ヘラケズリ [内]回転ナデ**	**[外]N6/:灰 [内]N6/:灰 普:3mm以下の長石・砂粒含む 良**	**接合痕有**
45	**31**	**SK8(貯蔵)**	**須恵器 坏身**	**- - [1.6]**	**[外]回転ナデ [内]回転ナデ**	**[外]5GY5/1:オリーブ灰 [内]2.5GY5/1:オリーブ灰 普:1mm以下の長石含む 良**	
46	33	SX3	須恵器 坏身	- - [2.15]	[外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]N5/:灰 [内]N7/:灰白 普:1mm以下の石英・長石含む 良	
47	36	SX9	須恵器 壺	[16.4] - 32.0	[外]回転ナデ、平行タタキ [内]回転ナデ、当て具痕	[外]2.5Y8/3:淡黄 [内]10YR6/4:黄橙 普:3mm以下の石英・長石・角閃石・赤色粒含む 不良	
48	36	SX9	土師器 壺	20.4 - [22.1]	[外]--- [内]指頭圧痕	[外]7.5YR7/4:にぶい橙 [内]10YR7/4:にぶい黄橙 普:2mm以下の長石・赤色粒、4mm以下の石英・砂粒含む 良	
49	37	SP4	須恵器 坏蓋	- - [2.7]	[外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]N6/:灰 [内]7.5Y8/1:灰 普:3mm以下の長石、2mm以下の砂粒含む 良	
50	37	SP4	須恵器 壺	- - [4.8]	[外]タタキ [内]同心円状当て具痕？	[外]2.5Y4/1:黄灰 [内]2.5Y6/1:黄灰 普:2mm以下の長石含む 良	
51	**39**	**第3調査区北拡張区 検査中**	**須恵器 坏蓋**	**- - [2.8]**	**[外]回転ナデ、ナデ [内]回転ナデ、ナデ**	**[外]N5/:灰 [内]N6/:灰 普:1mm程度の石英・長石含む 良**	
52	39	第5調査区 検査中	須恵器 坏蓋	[14.8] - [2.5]	[外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]2.5Y6/1:黄灰 [内]2.5Y6/1:黄灰 普:1mm程度の石英・長石・黒色粒含む 良	
53	39	第1調査区 検査中	須恵器 坏蓋	16.8 - [3.3]	[外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]2.5Y6/2:灰黄 [内]2.5Y7/2:灰黄 普:2mm以下の長石、4mm以下の砂粒含む 良	
54	39	第1調査区 検査中	須恵器 坏蓋	- - [3.2]	[外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]7.5Y6/1:灰 [内]N7/:灰白 普:2mm以下の石英、3mm以下の砂粒含む 良	
55	39	第1調査区 検査中	須恵器 坏蓋	- - [2.3]	[外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]N6/:灰 [内]N6/:灰 普:1mm以下の長石・角閃石・砂粒含む 良	
56	**39**	**第1調査区 検査中**	**須恵器 坏身**	**11.4 - 4.2**	**[外]回転ヘラケズリ回転ナデ [内]回転ナデ**	**[外]N6/:灰 [内]N6/:灰 普:1mm以下の長石、1mm以下の砂粒含む 良**	
57	39	第1調査区 検査中	須恵器 坏身	- - [1.9]	[外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]N7/:灰白 [内]N7/:灰白 普:1mm以下の石英・長石含む 良	
58	39	第1調査区 検査中	須恵器 坏身	- - [3.6]	[外]回転ヘラケズリ、回転ナデ [内]回転ナデ	[外]5Y8/1:灰 [内]N7/:灰白 普:2mm以下の砂粒含む 良	
59	39	第5調査区 検査中	須恵器 坏身	- - [2.55]	[外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]N6/:灰 [内]N6/:灰 普:1mm以下の石英・長石・黒色粒含む 良	
60	39	第3調査区東半 検査中	須恵器 坏身	- - [2.6]	[外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]N7/:灰白 [内]N7/:灰白 普:1mm以下の石英・長石・角閃石含む 良	

表４　観察表（土器）④

遺物番号	挿図番号	出土遺構	種別器種	口径 底径 器高	形態の特徴 手法の特徴[外][内]	色調[外][内] 胎土 焼成	備考
61	39	第3調査区東半傾斜付近 精査中	須恵器 坏身	－ － （1.4）	[外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]N8／灰 [内]N7／灰白 量:1mm以下の石英・長石・角閃石含む 良	
62	39	第5調査区 精査中	須恵器 坏身	－ － （1.25）	[外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]N8／灰 [内]N8／灰 量:1mm程度の石英・長石・黒色粒含む 良	
63	39	第5調査区 精査中	須恵器 坏身	－ － （1.4）	[外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]2.5Y6／1黄灰 [内]2.5Y6／1黄灰 量:1mm以下の石英・長石・黒色粒含む 良	
64	39	第5調査区 精査中	須恵器 高坏	－ 8.6 （5.7）	[外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]N8／灰 [内]N8／灰 量:2mm以下の長石含む 良	（スカシ）一部残存形状不明
65	39	第1調査区 精査中	須恵器 高坏	－ － （3.4）	[外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]N8／灰 [内]N8／灰 量:3mm以下の石英・長石含む 良	
66	39	第1調査区 精査中	須恵器 高坏	－ － （1.6）	[外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]N8／灰 [内]N8／灰 量:1mm以下の石英・長石・黒色粒含む 良	接合部でれる
67	39	第1調査区 精査中	須恵器 高坏	－ － （2.6）	[外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]N8／灰 [内]N8／灰 量:2mm以下の石英・長石含む 良	
68	39	第3調査区東半傾斜付近 精査中	須恵器 壺	－ － （4.0）	[外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]N8／灰 [内]5YR6／1褐灰 量:1mm以下の石英・長石・黒色粒・赤色粒含む 良	
69	39	第3調査区東半傾斜付近 精査中	須恵器 台付壺	－ － （7.2）	[外]回転ナデ，回転ヘラケズリ，ナデ [内]回転ナデ	[外]N8／灰 [内]N7／灰白 量:1mm以下の石英・長石・黒色粒・赤色粒含む 良	
70	39	第1調査区 精査中	土師器 壺	（22.4） － （9.9）	[外]回転ナデ，ナデ [内]回転ナデ，ナデ工具痕か？	[外]10YR7／4にぶい黄橙 [内]10YR8／4浅黄橙 量:2mm以下の石英・長石・黒色粒含む 良	
71	39	第1調査区 精査中	土師器 高坏	－ － （5.2）	[外]ナデ，指頭圧痕のちナデ [内]縦ヘラ目のちナデ	[外]10YR7／4にぶい黄橙 [内]7.5YR6／4にぶい橙 量:2mm以下の石英・長石・黒色粒・赤色粒含む 良	

表５　観察表（玉類・石器）

遺物番号	挿図番号	出土遺構	種類	機種	法量				備考
					最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	
S1	11	SI7カマド(北東部)	玉	臼玉	0.5	（0.3）	（0.15）	重量計測不能 (0.1g未満)	滑石
S2	14	SI10	玉類	管玉	（2.5）	0.8	0.8	2.4g	碧玉
S3	21	SI15 埋土	玉	臼玉	0.5	（0.3）	（0.25）	重量計測不能 (0.1g未満)	滑石
S4	29	SD1	礫石	砂岩	24.25	16.3	6.0	3500g	長面に被熱痕有 擦痕多数有

表６　観察表（鉄器）

遺物番号	挿図番号	出土遺構	種類	機種	法量				備考
					最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	
T1	33	SX3	鉄器	棒状	（3.9）	（1.1）	（1.0）	5.6g	

第３調査区東半

第３調査区西半

写真図版2

第４調査区

第４調査区ＳＢ３・４

第3調査区南拡張区～東拡張区

第3調査区南拡張区柵列1

写真図版4

第１調査区地山確認状況

第２調査区完掘状況

第５調査区完掘状況

Ｓ１７貼床上面掘削状況

Ｓ１７カマド遺物出土状況

Ｓ１７カマド完掘状況

写真図版6

ＳＩ 10 貼床上面掘削状況

ＳＩ 10 南半

ＳＩ 10 カマド半截状況

第３調査区東半北壁付近完掘状況

ＳＢ２完掘状況

ＳＫ３完掘状況

ＳＰ４半截状況

ＳＩ12埋土除去後掘削状況

ＳＩ14完掘状況

第３調査区北拡張区完掘状況

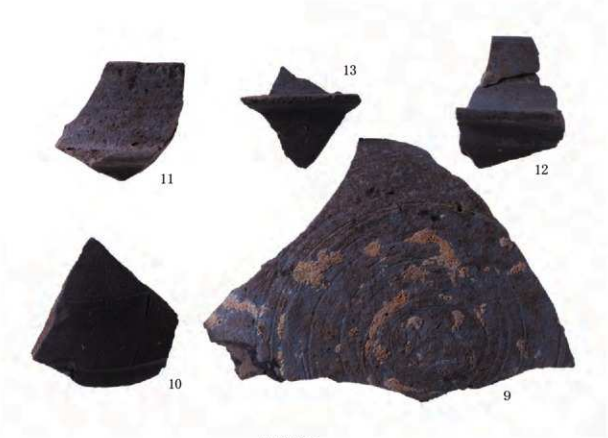
写真図版8

ＳＤ１遺物出土状況

ＳＩ15 貼床上面掘削状況

ＳＩ15 カマド完掘状況

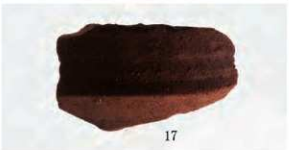
出土遺物①



出土遺物②

出土遺物③

写真図版12



出土遺物④

出土遺物⑤

写真図版14

出土遺物⑥

報 告 書 抄 録

ふりがな	はぎのまえ・いっぽんぎいせきⅤ
書名	萩前・一本木遺跡Ⅴ
副書名	仏生山駅前マンション建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第254集
編著者名	品川愛
編集機関	高松市教育委員会
所在地	〒760－8571　香川県高松市番町一丁目8番15号　TEL087－839－2660
発行年月日	令和6年6月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	発掘原因
はぎのまえ・いっぽんぎいせき 萩前・一本木遺跡	かがわけん 香川県 たかまつし 高松市 ぶつじょうざんちょう 仏生山町	37201	10971	34° 16′ 58″	134° 2′ 31″	2022. 12. 1～ 2023. 5. 26	1,137㎡	マンション建設工事

所収遺跡名	種別	おもな時代	おもな遺構	おもな遺物	特記事項
萩前・一本木遺跡	集落遺跡	古墳時代 飛鳥時代	竪穴建物 土坑 溝 掘立柱建物 柵 ピット	土師器 須恵器 鉄製品 玉 石製品	

要約	萩前・一本木遺跡は高松市仏生山町に所在する古墳時代～飛鳥時代を中心とする集落遺跡である。今回の調査区は遺跡東部に当たり、古墳時代中期中葉～飛鳥時代の竪穴建物や掘立柱建物等を検出した。また、調査地の南に隣接する地点では、過去の調査において区画溝が検出されていたが、今回の調査ではその延長部は確認されなかった。

2024 年 6 月 30 日　発行

高松市埋蔵文化財調査報告第 254 集
仏生山駅前マンション建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書
萩前・一本木遺跡Ⅴ

編　集　者　高松市番町一丁目 8 番 15 号
高松市教育委員会
発　行　者　高松市教育委員会
穴吹興産株式会社
印　刷　者　有限会社　中央ファイリング